



Title	村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (2)
Author(s)	麻, 子軒; 山木戸, 浩子; 金水, 敏
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71875
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

村上春樹翻訳調査プロジェクト 報告書(2)



2019年3月

研究代表者

金水 敏

巻 頭 言

金水 敏
(大阪大学)

『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書』の第 2 巻をお送りする。本プロジェクト設立の経緯については、報告書第 1 巻をご覧ください。第 1 巻は大阪大学リポジトリ「OUKA」で無償公開されている（アクセス方法については下欄参照）。

第 2 号には、麻子軒氏、山木戸浩子氏と金水の 3 本の論文を収めることができた。麻子軒氏の論文は、『1Q84』のキャラクターの話し方について、計量的な調査方法により原文と中国語（繁体字版）の対照研究を行っている。この研究方法は今後の発展性が期待できる。山木戸氏の論文は、山木戸浩子（2018）「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳-村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える-」（『通訳翻訳研究への招待』19: 1-21.）のいわば再録であるが、投稿に当たって大幅に割愛した内容を復活させた完全版であり、このバージョンは本報告書のみで公開されることとなる。金水論文は『ことばと文字』10 に公開されたものの再録であるが、本書所収の山木戸論文、あるいは金水論文に引用されている住田論文と併せて読まれることが望ましい。翻訳における表記の問題は、今後さらに追求されるべき課題である。

本報告書第 1 巻に寄稿した留学生の皆さんは、博論・修論を終えて帰国された方もあり、また博士前期から後期へと進学された方もあり、2019 年度に博士論文執筆を予定している方もある。2019 年度には新しい留学生を迎えることも出来た。役割語・キャラクター言語と翻訳の問題は、興味の尽きない研究対象であり、これからも研究者の興味を惹き続けることと思う。本プロジェクトのこれからの展開に期待されたい。

※『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (1)』が収められている大阪大学リポジトリ「OUKA」の URL は下記の通り。

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

また、google などの検索エンジンで「大阪大学リポジトリ 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書」で検索すれば、直接アクセスすることが可能である。

※本プロジェクトの活動は、随時下記ブログで公表されるので参照されたい。

「SK の役割語研究室」: <http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/>

目 次

巻頭言..... 金水 敏（大阪大学）

目次

- 1 『1Q84』のキャラクターに見る特徴的表現の日中対照
—計量的アプローチを用いて—..... 麻 子軒（大阪大学） 1
 - 2 ナカタさん（『海辺のカフカ』）の変わった話し方は英語でどのように翻訳されるのか
..... 山木戸 浩子（藤女子大学） 18
 - 3 小説における仮名の一用法と翻訳 —村上春樹作品を例に—
..... 金水 敏（大阪大学） 51
- 著者情報（2019年4月現在） 58

『1Q84』のキャラクターに見る特徴的表現の日中対照

—計量的アプローチを用いて—

麻 子軒

(大阪大学大学院文学研究科)

1. はじめに

本稿の目的は、村上春樹の長編小説『1Q84』に見られる役割語を中心とする特徴的な表現を抽出し、それが中国語版の訳本でどのように翻訳されているかを明らかにすることである。日本語では、ほかの言語に比べて役割語・キャラクター言語のバリエーションが豊富と言われているが、言語構造の制限により、異なる言語では再現されにくい場合がある。本稿では、『1Q84』の原作と中国語版（繁体字）の訳本を調査資料にして、キャラクターの特徴語を統計的な手法で取り出し、両言語の共通点と相違点を比較する。その研究成果は、日中におけるキャラクターの特徴的な表現の違いはもちろん、異なる言語間での翻訳技法の解明にも貢献できる。なお、本稿では計量的アプローチを用いて機械的に特徴語を抽出するため、従来の役割語とキャラクター言語の定義に収まらないものも入っている可能性がある。したがって、以下ではこれらを言及する際はより意味範囲の広い「特徴的な表現」という表記を用いる。

2. 先行研究

「役割語」は金水（2003）で最初に提出された概念で、その定義は次のようになる。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（金水 2003 : 205）

役割語は例えば「老人ことば」「書生ことば」など、多数存在する。具体的に言えば、一人称代名詞「わし」や、文末表現「じゃ」などが老人ことばに該当する。

役割語は特定の人物像の集合を想起させる表現であるのに対し、フィクションの中でキャラクターに割り当てられた特有の話し方として、金水（2016）は「キャラクター言語」という概念を提唱した。例えば、『1Q84』に登場した「ふかえり」というキャラクターは非常に特殊な話し方をしており、一種のキャラクター言語に属すると思われる。

役割語・キャラクター言語に関する理論的な研究には、金水（編）（2007、2011）が

ある。また、異なる言語における役割語・キャラクター言語の訳し方については、金水(編)(2018)による報告があった。その中で、日本語と中国語との違いに焦点を当てた劉(2018)では、『海辺のカフカ』を対象にして、日中のキャラクターの言語表現に注目し、分析を行った。その結果、日本語では「人称代名詞」「文末表現」「片仮名表記」が、中国語では「四字熟語」がキャラクターの特徴的な表現として挙げられた。しかし、両言語の構造的な相違により、日本語に見られる役割語などは一部の一人称代名詞を除いて、ほぼ中国語に訳されておらず、原作のキャラクターの性格が訳本に反映されたとはいえないことも述べられた。本稿では、先行研究と異なる作品を対象に調査するとともに、研究方法もこれまでとは異なる計量的アプローチを用いて、役割語を中心とするキャラクターの特徴的な表現の訳し方をめぐる新たな可能性を探る。

3. 調査概要

調査資料は、村上春樹の長編小説『1Q84』にする。村上春樹の小説は、世界各国で多くの言語に訳されて、役割語・キャラクター言語の対照研究に適している。また、これまでの先行研究も村上春樹の作品について調査をしたものであるため、比較しやすいメリットもある。使用テキストに関して、原作は村上(2009a、2009b、2010)、中国語版(繁体字)は頼(訳)(2009a、2009b、2010)を使用する。以下、用例を引用する際、原作の「BOOK1」「BOOK2」「BOOK3」と訳本の「BOOK1」「BOOK2」「BOOK3」はそれぞれ「J-1」「J-2」「J-3」と「C-1」「C-2」「C-3」のように略記する。

調査対象は原則的にすべての登場人物の会話文にするが、発話数が極端に少ないキャラクターは計量的な分析に向いていないため除外する。本稿で最終的に統計処理に使うキャラクターとして選定されたのは、天吾、青豆、ふかえり、牛河、タマル、老婦人(緒方)、リーダー(深田保)、坊主頭(穂田)、小松、あゆみ、以上の10名である。対象にした会話数は計7165である。

これまで金水(2003)では、役割語はある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)によるもので、特に代名詞や文末表現に現れやすいとされているが、先行研究の劉(2018)でも述べられたように、片仮名表記も一種の特徴的な話し方を示す手段であるため、本稿では抽出した特徴語の一覧表を便宜上品詞別に提示するが、分析の際は特に品詞に拘らず、探索的な方法で考察を試みる。

4. 調査方法

調査の手順は、まず原作と中国語版の『1Q84』に見られるキャラクターのセリフをすべてデータ化し、プレーンテキストとして保存する。セリフかどうかを判断する基準はかぎ括弧の中にあるかによる。その際、該当セリフの発話者も明記する。

次に、調査対象の特徴的な表現を抽出する準備作業として、セリフを形態素解析器で処理しておく。日本語に関して、解析器はMeCab 0.993、辞書はUniDic1.3.12を使用する。

処理の結果は形態素相当の短い単位のデータであるが、形式用言だけを長い単位に整形する。これは、例えば、「言っとくけど」の「とく」は助動詞として解析されるものの、「ておく」は接続助詞「て」+動詞「おく」になるため、その基準を統一するための作業である。中国語に関して、解析器はNLPIRを用いる。こちらで得られた結果も形態素相当の短い単位のデータであるため、日本語の結果と比較しやすいメリットがある。

続いて、EXCELのピボットテーブル機能を用いて、キャラクターと形態素解析後の単語とのクロス表を作成する。日本語に関して、単語を集計する際は、語彙素レベルではなく語形レベルで行う。その理由は、語彙素で集計すると、「わし／わたし」はすべて「私」としてまとめられるため、役割語を判断する手掛かりが無くなるからである。中国版に関して、表記の手段は日本語ほど複雑ではないため、出現形のままで集計する。

最後に、統計手法を用いて、各キャラクターに見る特徴的な表現を抽出する。本稿で用いる方法は特化係数である¹。特化係数とは、全体についての構成比を基準にして、各語についての構成比を、その何倍にあたるかという形で、表現したものである（国立国語研究所 1997）。本稿では、該当キャラクターで15回²以上出現し、かつ特化係数が2以上（使用確率が2倍であること）の単語を特徴語として選出する。なお、中国語は日本語のように、役割語の明確な指標となる表現や体系が提示されていないため、まず日本語を基準にして、それと対応する中国語の訳を見る方法を採用する。

5. 考察

以下では、話し方に特に特徴的な表現が見られる6名の登場人物を男性キャラクターと女性キャラクターに分けて考察を行う。形態素解析器の仕様上、集計結果は品詞別に示す。もっとも、品詞は日中両言語では完全に対応していないが、便宜上以下の[表1]のように処理する。日本語と中国語の品詞ラベル名は、形態素解析器の処理結果に従う。基本的に日本語の品詞分類に合わせるが、一部ラベルを統合したものもある。なお、接尾辞のように複数の品詞にまたがるものもある³。

¹ 特徴語を求める方法として対数尤度比も挙げられるが、特化係数のほうが直観的な解釈ができるため、本稿では後者のほうを採用する。

² ふかえりはもともとセリフが比較的少ないため、10回以上のものを特徴語とする。

³ 名詞接尾辞「さ」・動詞接尾辞「めく」・形容詞接尾辞「っぽい」などの可能性がある。

[表 1] 品詞分類対照表

本稿の分類	日本語	中国語
代名詞	代名詞	代詞
名詞	名詞、接頭辞、接尾辞	名詞、時間詞、處所詞、方位詞、數詞、量詞、前綴詞、後綴詞
形容詞	形容詞、形状詞、接尾辞	形容詞、狀態詞
副詞	副詞	副詞
動詞	動詞、接尾辞	動詞
接続詞	接続詞	連詞
感動詞	感動詞	嘆詞、語氣詞
助動詞	助動詞	—
助詞	助詞	介詞、助詞

5.1 男性キャラクター

5.1.1 天吾

天吾は、この小説の主人公であり、職業は塾の講師だが、小説も書いている。本作では『空気さなぎ』という小説のゴーストライターをつとめ、それをベストセラーにさせた人物である。[表 2]によると、彼の日本語における特徴的な表現として、一人称代名詞「僕」、二人称代名詞「君」が挙げられる。特に「僕」はいわゆる「男ことば」に該当する。そのほか、「じゃあ」「つまり」も多用されていることが見て取れるが、これは役割語というより、口癖のようなものである。まだキャラクター言語までは言えないが、強いて言えばそれに近いものである。名詞と動詞に関して、特化係数が 2 以上のものはストーリー上、天吾が多く口にしてしている言葉である。その証拠に、日本語と中国語の中身はほぼ同じであることが挙げられる。つまり、これらのものが特徴語として上がっているのは、物語の内容によるもので、当該キャラクターの人物像を想起させる役割語ではない。以下、特別な事情がない限り、名詞と動詞に関する特徴語は特に言及しないことにする。

[表 2] 天吾の特徴語

品詞	日本語	中国語
代名詞	僕 (441)、君 (162)	妳 (267)
名詞	小松 (67)、父 (24)、町 (19)、作品 (31)、父親 (22)、女の子 (18)、集金 (15)、意識 (17)、空気さなぎ (67)、新人 (15)、ドウタ (18)、ふかえり (37)、物語 (17)、本 (27)、先生 (39)、小説 (37)、賞 (17)	別人 (18)、小松 (58)、獎 (17)、父親 (37)、作品 (32)、意識 (15)、Daughter (19)、空気蛹 (67)、老師 (41)、小説 (29)、深繪里 (37)
副詞	ずっと (23)、つまり (49)	
動詞	始める (16)、書く (54)、立てる (15)、書き直す (20)、戻る (16)、読む (43)	改寫 (30)、寫 (67)、見面 (16)
接続詞	じゃあ (17)	
助詞		由 (16)

※ 括弧内は度数、以下同

(1) (2) に見られるように、天吾は日本語版では自称詞として優しい男性を想起させる「僕」を用いているが、中国語版では「我」になっている。中国語の「我」は日本語の「僕」と異なり、誰でも使える汎用性の高い一人称代名詞である。実際、特化係数を計算した結果、「我」が中国語の特徴語として上がっていない。したがって、「僕」と「我」は両言語で言語構造において対応しているが、中国語の「我」は役割語的な要素をもっていないことが分かる。

- (1) a. じゃあ、僕の場合はどうなんですか？ (J-1, p.39)
- b. 那麼、我的情況又怎麼樣呢？ (C-1, p.28)
- (2) a. 小松さんが書き直しを始めるようにと僕に言った (J-1, p.139)
- b. 小松先生叫我開始改寫。(C-1, p.102)

二人称代名詞も同じく、日本語の「君」は形式上中国語の「妳」と対応しているが、「妳」は相手が女性であれば誰に対しても使える代名詞で、役割語的要素は入っていない。もっとも、中国語の二人称代名詞には「你」と「妳」との2種類が存在するが、これらの区別は相手の性別によるもので、話し手の属性を表すものではない。天吾はこの小説では、(3) (4) のように、「君」という表現はほとんど「ふかえり」という女性に対して使っているため、「妳」が特徴語になったのだと思われる。

- (3) a. 君は数学は好き？ (J-1, p.87)
- b. 妳也喜歡數學？ (C-1, p.62)
- (4) a. それは君がつけたタイトルじゃないの？ (J-1, p.93)
- b. 這不是妳取的名字嗎？ (C-1, p.67)

日本語の「君」は162例あるのに対し、中国語の「妳」は267例とそれよりも多いのは、(5)(6)に示したように、日本語では主語を省略する傾向があるからだと思われる。

- (5) a. 高校三年生なんだね？ (J-1, p.85)
- b. 妳是高中三年級吧？ (C-1, p.60)
- (6) a. じゃあどうしてあのお話を書いて、新人賞に応募したの (J-1, p.90)
- b. 那妳為什麼寫下那個故事，投稿給新人獎？ (C-1, p.64)

接続詞「じゃあ」と副詞「つまり」は話をまとめる、整理するなどの機能をもっている。この特徴的な表現から、天吾というキャラクターの論理的な話し方の癖が少し出ている。『ちびまる子ちゃん』に登場した丸尾君の「ズバリ、○○○でしょう」ほど強いキャラクター言語ではないが、この物語中で、天吾の口癖と言っている表現である。この要素は(7)～(10)に示したように、日中両言語に現れている。

- (7) a. じゃあ、僕はいったい何なのですか？ (J-2, p.174)
- b. 那麼，我到底是什麼？ (C-2, p.126)
- (8) a. じゃあ、日曜日の九時に (J-1, p.141)
- b. 那麼星期天九點見。 (C-1, p.103)
- (9) a. つまり、うちの予備校の生徒だということ？ (J-1, p.84)
- b. 也就是說，妳是我們補習班的學生？ (C-1, p.60)
- (10) a. この近くに？つまり高円寺にということ？ (J-2, p.379)
- b. 在這附近？也就是在高圓寺的意思嗎？ (C-2, p.285)

天吾に関して、役割語的な要素は代名詞と接続表現に現れる。前者は言語構造の関係で、中国語では訳されていないが、後者は反映されている。

5.1.2 タマル

タマルは、冷静な性格の持ち主で、もともと自衛隊の特殊部隊に所属していたことから、気性が強く頼りがいのある「男ことば」を話している。[表3]によると、特徴的な表現は一人称代名詞「俺」、二人称代名詞「あんた」、三人称代名詞「そいつ」「やつ」、終助詞「な」などがある。

[表 3] タマルの特徴語

品詞	日本語	中国語
代名詞	あんた (180)、俺 (198)、そいつ (43)、やつ (16)	妳 (219)、傢伙 (32)
名詞	ネズミ (32)、マダム (18)、天吾 (40)、連中 (22)、拳銃 (15)、犬 (18)、日本 (16)、牛河 (19)、川奈 (45)、上 (20)	老鼠 (31)、子彈 (15)、夫人 (18)、槍 (25)、狗 (22)、天吾 (40)、牛河 (18)、川奈 (45)、日本 (16)、棟 (17)
形容詞	深い (25)	
動詞	すぎる (18)、死ぬ (23)、入れる (17)、入る (25)	死 (30)
助詞	な (88)	

(11) (12) に示したように、タマルが用いている一人称代名詞「俺」は、中国語では「我」と訳されている。すでに述べたように、「我」は中国語では役割語的な要素が入っていない自称詞であるため、気性が強いというタマルの人物像が中国語版では再現されたとは言いにくいと思われる。

- (11) a. 俺は真面目な話しかしない (J-1、p.162)
 b. 我只說認真的。(C-1、p.120)
- (12) a. その理由は、と俺は更に質問するだろうな (J-1、p.29)
 b. 我大概會繼續問，理由呢？(C-1、p.19)

二人称代名詞も同様、日本語の「あんた」という表現は気性の強い男が話すイメージであるのに対し、中国語の「妳」は単に女性を表す代名詞である。

- (13) a. あんたに言われたから気になってね。(J-1、p.382)
 b. 被妳一說掛心起來呀。(C-1、p.290)
- (14) a. あんたはこれで誰かを撃つわけじゃない。(J-2、p.74)
 b. 妳不是要用這個射擊誰。(C-2、p.53)

三人称代名詞に関して、(15) (16) のように「傢伙」に訳されている場合もあれば、(17) (18) のように中立的な「他」に訳されている場合もある。「傢伙」という言葉遣いは乱暴なイメージを想起させ、日本語の「そいつ」と類似したニュアンスをもっている。

- (15) a. そいつは何をやらせてもとにかく駄目なんだ。(J-2、p.368)
 b. 那傢伙讓他做什麼都不行。(C-2、p.276)
- (16) a. わかっているのは、そいつが有能であり… (J-3、p.333)
 b. 我只知道，這傢伙能力很強，很危險。(C-3、p.255)

- (17) a. そいつを保護する役を引き受けるようになった。(J-2、p.367)
 b. 就接下了保護他的任務。(C-2、p.276)
- (18) a. 今でもそいつのことをよく考える。(J-2、p.369)
 b. 我現在也常常想起他。(C-2、p.278)

終助詞「な」は、日本語では男性が「ね」の代わりに用いることがあり、一種の役割語的表現と見なすことができよう。この言語的特徴は(19)(20)のように、中国語ではほとんど訳されていないことが分かる。しかし、これは中国語に同じ機能をもつ終助詞がないわけではない。実際、ほかのキャラクターのセリフの中で、類似した機能をもつ「ね」は「啊」と翻訳されている。つまり、タマルの終助詞「な」は訳者が意図的に訳さなかったのだと思われる。その理由は、中国語で終助詞を多用する男性は子供っぽいという性格と結びつくことがあるため、いつも冷静さを保って任務を遂行するタマルにとってこの表現はあまり相応しくないと訳者が判断したからかもしれない。

- (19) a. 今のところ、それほど元気とは言えないな (J-1、p.157)
 b. 目前不能算太健康。(C-1、p.116)
- (20) a. 時間はある。時間を潰すのが俺の仕事の一部だからな (J-2、p.26)
 b. 有時間。因為消磨時間也是我工作的一部分。(C-2、p.17)

タマルというキャラクターの人物像は、三人称代名詞を通して中国語にも一部再現されたが、終助詞の要素はほぼ訳されなかった。しかし、敢えて訳さなかったのもタマルというキャラクターの人物像を作るためだった可能性がある。

5.1.3 牛河

牛河は、ある団体に雇われて、裏で主人公である天吾と青豆について調べているキャラクターである。理事という偽りの身分で聞き取り調査をすることが多いため、丁寧な言葉遣いを多用する。特徴語として、謙譲語(申し上げる)、丁寧語(ます・です)、美化語(ご・お)、その他の待遇表現(ておる・ていただく)が挙げられる。

[表 4] 牛河の特徴語

品詞	日本語	中国語
代名詞		你們 (35)、您 (134)
名詞	川奈 (58)、ご (29)、個人 (23)、女性 (17)、青豆 (37)、名前 (20)、リーダー (19)、電話 (20)、お (75)	小姐 (31)、先生 (60)、青豆 (39)、領導 (19)、川奈 (56)、幾 (22)
副詞		真 (19)
動詞	申し上げる (19)	
感動詞	ああ (21)、いや (18)	啊 (39)
助動詞	ておる (42)、ていただく (17)、ます (389)、です (357)、ぬ (167)	

日本語は待遇表現が非常に発達しているが、中国語はそうではない。例えば、敬語に関しては、前者は生産性の高い文法レベルによる手段を揃っているが、後者は語彙レベルによる手段しかもっていない。そのため、牛河というキャラクターの発話に見られた丁寧さの要素は、中国語では「人称代名詞」や「敬称」という語彙レベルの手段で表すことが多い。例えば、代名詞「您」や、名詞「小姐」「先生」などがそれである。(21) では、謙譲語「申し上げる」+丁寧語「ます」という表現の代わりに、中国語では目上の人に対する二人称代名詞「您」を用いたと考えられる。(22) についても同じことが言える。

- (21) a. 具体的に申し上げますと、一人あたり三百万円の年間助成金が出ます
 b. 具體向您報告，一個人一年我們出三百萬圓補助金。
- (22) a. たしかにまとまったかたちでは、一度も作品は発表されておりません。
 b. 您確實還沒有已完整形式，發表過一次作品。

(23) (24) のように、美化語を表す接頭辞「お・ご」も、中国語では同じく二人称代名詞「您」で表現されている例が多数観察される。

- (23) a. なるほど。お考えは私なりによくわかります。(J-2、p.50)
 b. 原來如此。您的想法我很能理解。(C-2、p.34)
- (24) a. ご休憩のところに、アポも入れずにお邪魔して… (J-2、p.42)
 b. 您正在休息，也沒預約就來打攪… (C-2、p.28)

また、二人称代名詞「您」ではなく、「名前+敬称」で敬意を表す場合もある。例えば、(25) の「先生」は男性に対する敬称で、(26) の「小姐」は女性に対する敬称である。いずれも中国語では特徴語になっている。もっとも、日本語の「ておる」と中国語の「先生」「小姐」とは言語的に対応しているわけではないが、ここで訳者が「先生」「小姐」を選択したのは、日本語の「ておる」という待遇表現によると考えられる。

- (25) a. 川奈さんが今現在、長編小説を書いておられることは… (J-2、p.48)
 b. 川奈先生現在、正在寫長篇小説的事… (C-2、p.33)
- (26) a. 青豆さんは宗教的な背景をもつておられたとうかがっています (J-3、p.195)
 b. 聽說青豆小姐具有宗教背景。(C-3、p.150)

以上見てきたように、日本語では牛河のような丁寧な言葉遣いは主に接頭辞・動詞・助動詞によって表現されるが、中国語では二人称代名詞や敬称で表現されることが多いことが分かった。

5.2 女性キャラクター

5.2.1 青豆

青豆はこの物語のもう一人の主人公である。職業は高級スポーツ・クラブのインストラクターである。女性キャラクターであるため、いわゆる「女ことば」を話している。調査した結果、目立った表現は一人称代名詞「私」、接続助詞「けれど」、終助詞「かしら」などである。

【表 5】 青豆の特徴語

品詞	日本語	中国語
代名詞	私 (330)	你 (165)
名詞	筋肉 (19)、本当 (16)	肌肉 (18)
形容詞	大きい (15)	
動詞	殺す (15)	殺 (15)
感動詞	ありがとう (32)、あの (19)	嗯 (15)、謝謝 (31)
助詞	けれど (21)、かしら (39)	

日本語の一人称代名詞「私」は男性でも女性でも使えるが、インフォーマルな場合でも「私」と言うのは女性のほうが多いため、特定の人物像に繋がる役割語だと思われる。この一人称代名詞は、(27) (28) に示したように、中国語では「我」という選択肢しかないため、原文もともとのニュアンスは伝わっていない。

- (27) a. 私も大きな仕事をひとつ、ついさっき終えたばかりなの (J-1、p.108)
 b. 我也才剛剛完成一件大工作。(C-1、p.78)
- (28) a. 違うと思います。私の考え方はあくまで個人的なものです。(J-1、p.241)
 b. 我想不是。我的想法只是個人性的。(C-1、p.180)

なお、中国語では二人称代名詞「你」が特徴語になったのは、青豆が会話している相手は男性キャラクターが相対的に多いためだと思われ、彼女の人物像によるものではない。

接続助詞「けれど」について、日本語では「が」という選択肢も存在するが、「けれど」は女性が使うイメージがある。前置きを表す(29)では訳されていないことが多いが、逆接を表す(30)のように訳されたとしても中国語では中立的なもので女性専用の表現ではなくなっている。(31)(32)は男性キャラクター(タマル)の発話で、硬いイメージの「が」が選択されているが、「けれど」の場合と同様、中国語では意味的に等価の言語形式が存在しても、役割語的な要素は含まれていない。

- (29) a. 教団内部に情報源があると聞いたけれど (J-3, p.155)
b. 聽說你們在教團内部有情報來源。(C-3, p.119)
- (30) a. ひとりぼっちではあるけれど、孤独ではない (J-3, p.48)
b. 雖然孤伶伶一個人，但不孤獨。(C-3, p.36)
- (31) a. ひとつわかってもらいたいのだが (J-3, p.48)
b. 我希望妳明白一件事。(C-3, p.36)
- (32) a. チューホフは優れた作家だが、当然のことながら… (J-2, p.79)
b. 不過契訶夫雖然是個傑出的作家，但當然… (C-2, p.56)

終助詞「かしら」に関して、(33)(34)のように、中国語ではすべて訳されていないことが確認できる。なぜなら、中国語では女性専用の疑問終助詞が存在しないからだ。訳文では、ほかに女性の発話であることを積極的に明示する言語的特徴も見当たらず、原作に見られる「女ことば」の要素がなくなっている。

- (33) a. もう夜も遅いし、ひとつ率直に質問していいかしら? (J-1, p.112)
b. 夜深了，我可以開門見山問一個問題嗎? (C-1, p.82)
- (34) a. 最近警官の制服が変わったかしら? (J-1, p.110)
b. 最近警察的制服是不是換了? (C-1, p.80)

特化係数が2以上にも関わらず、度数が15以下であるため、[表5]に上がっていないが、以下の(35)～(38)も「女ことば」に属している役割語だと思われる。(35)(36)の感動詞「ねえ」は日中両言語で対応する表現がある一方、(37)(38)は上述の「かしら」と同じように、中国語では類似した機能をもつ要素がないため再現することができない。

- (35) a. ねえ、なかなか立派なものじゃない。(J-1, p.118)
b. 嘿，相當氣派的東西嘛。(C-1, p.86)
- (36) a. ねえ、タマルさん、ひとつ教えてほしいことがあるんだけど (J-1, p.160)
b. 嘿，Tamaru 先生，我想請教你一件事。(C-1, p.118)
- (37) a. じゃあ私の方から言うわ (J-1, p.248)
b. 那，我先說好了。(C-1, p.186)

(38) a. いいわよ。空いてるから (J-1, p.245)

b. 可以呀。空著啊。(C-1, p.184)

青豆の特徴的な表現では、言語構造上、感動詞以外の言葉遣いはほぼ日本語にしか存在しないため、中国語では青豆の話し方は日本語に比べて女性らしさが際立たなくなった。

5.2.2 あゆみ

あゆみは、青豆の友人で、登場したのは物語の前半だけだが、作中で最も女性らしいと思われるキャラクターである。特徴的な表現は、感動詞「ねえ」、助動詞「てる」「みたい」、副助詞「って」、間投助詞「さ」、接続助詞「けど」、終助詞「よ」「ね」など種類が多いため、以下では代表的なもののみを取り上げる。

[表 6] あゆみの特徴語

品詞	日本語	中国語
名詞	青豆 (65)、さきがけ (15)、教団 (25)、警察 (17)、金 (15)、子供 (20)、男 (29)	青豆 (66)、姊 (63)、先驅 (15)、員警 (21)、男人 (23)、教團 (18)
形容詞	好き (16)	
副詞	ちょっと (15)	
動詞		喜歡 (19)
感動詞	ねえ (16)	嘿 (17)
助動詞	てる (40)、みたい (48)	
助詞	って (99)、たり (16)、さ (27)、けど (67)、よ (92)、ね (81)、ん (110)	

青豆と同様、あゆみも (39) (40) のように、感動詞「ねえ」を多用している。すでに 5.2.1 節で見たように、類似した表現は中国語にも存在している。

(39) a. ねえ、何を飲んでるの？ (J-1, p.244)

b. 嘿，你在喝什麼？ (C-1, p.183)

(40) a. ねえ、男の人からお金をもらうことが気になる？ (J-1, p.514)

b. 嘿，收男人的錢，妳介意是嗎？ (C-1, p.390)

推量を表す助動詞に関して、「ようだ」という選択肢もあるが、女性キャラクターはそれよりも「みたい」を選ぶ傾向があるように思われる。(41) (42) はあゆみの発話で、どちらも「みたい」を用いている。それに対して、(43) (44) は男性キャラクター (タマル) の発話で、こちらでは「ようだ」を話している。訳文では、前者が「好像」、後者が「似乎」と、異なる表現に訳されていることが確認できた。

- (41) a. 見たところ、こういう場所にはあまり慣れてないみたい。(J-1、p.254)
 b. 看起來，他們對這種場所好像不太習慣。(C-1、p.191)
- (42) a. なんかしつこく詮索するみたいで、気を悪くしてない？(J-1、p.342)
 b. 我好像問太多了，妳有沒有不高興？(C-1、p.258)
- (43) a. どうやら俺たちには共通点があるようだ(J-3、p.498)
 b. 我們似乎有共同點。(C-3、p.378)
- (44) a. わかった。知らなかったというのは本当のようだな。(J-3、p.501)
 b. 好吧。你說不知道似乎是真的。(C-3、p.381)

間投助詞「さ」は女性限定ではないが、作中ではあゆみの言語的特徴になっている。ほとんど(45)(46)のように訳されていないが、一部だけ(47)(48)のように終助詞相当の「啊」「呀」に訳されている例が見られる。

- (45) a. でもさ、ゆうべは楽しかったよ。(J-1、p.283)
 b. 不過，昨天晚上很快樂噢。(C-1、p.213)
- (46) a. だから二人で裸でさ、おっぱいをちょっとさわったり…(J-1、p.346)
 b. 就是兩個人脫光了，摸一下乳房…(C-1、p.261)
- (47) a. でもさ、私って青豆さんに憧れているんだ。(J-1、p.350)
 b. 不過啊，我喜歡青豆姊。(C-1、p.264)
- (48) a. 私は思うんだけど、この世界ってさ、理屈も通ってないし…(J-1、p.344)
 b. 我這樣想，這個世界呀，既不講理…(C-1、p.260)

接続助詞「けど」も5.2.1節で述べた青豆の「けれど」と同じく「女ことば」相当の表現である。(49)(50)はその例だが、訳文に女性キャラクターを想起させる要素はない。

- (49) a. あさっては空いている？夕方からあとしてことだけど(J-1、p.331)
 b. 後天有空嗎？我是說傍晚以後。(C-1、p.249)
- (50) a. ベレッタはたしかに重量はあるけど、撃った反動は…(J-1、p.250)
 b. 貝瑞塔雖然確實重了點，不過擊發時的後座力…(C-1、p.188)

終助詞「ね」「よ」も「女ことば」の特徴として挙げられる。河崎(2011)によれば、終助詞を多用することは中国語の女性キャラクターに対しても同じことが言える。(51)～(54)に示したように、この言語形式は中国語ではほぼ完全に翻訳されている。

- (51) a. そいつはちっとむずかしい問題ね。(J-1、p.248)
 b. 這是個有點難的問題啲。(C-1、p.186)
- (52) a. そうなのって私、好きだよ。びりびりきちゃうね(J-1、p.527)
 b. 我很喜歡這種事。會發抖起來啲。(C-1、p.400)

- (53) a. あれからけっこうすごかったんだよ。(J-1、p.283)
 b. 後來很精彩哟。(C-1、p.214)
- (54) a. そういうのってうらやましいよ。(J-1、p.350)
 b. 我好羡慕妳哟。(C-1、p.264)

なお、日本語には特徴的な要素として現れていないが、中国語ではあゆみという女性キャラクターの特徴を目立たせるために訳者が用いた表現として、相手との親密な関係を表す接尾辞「姊」がある。(55) (56) がその例である。

- (55) a. でもさ、青豆さんは怖くないのかな？(J-1、p.342)
 b. 不過，青豆姊不會害怕嗎？(C-1、p.258)
- (56) a. ねえ青豆さん、どうしてそんな細かいことまで知ってるわけ？(J-1、p.250)
 b. 嘿，青豆姊，妳怎麼連這麼詳細的事情都知道呢？(C-1、p.188)

あゆみの発話に「女ことば」の特徴が多く含まれている。用例を検討した結果、感動詞をはじめとする様々な言語的特徴は中国語にも反映されていることが分かった。

5.2.3 ふかえり

ふかえりは、女子高生という設定だが、もともとはある団体の巫女だったため、話し方が非常にユニークである。例えば、疑問文の代わりに平叙文を用いる、発話が短い、セリフは基本的に平仮名で表記する、難しい単語は片仮名で表記するなど、ほかのキャラクターに見られない要素が多く入っている。

【表 7】 ふかえりの特徴語

品詞	日本語	中国語
代名詞	なに (19)、わたし (51)、いつ (11)、ここ (13)	你 (63)、為什麼 (10)
名詞	ホン (12)、まち (11)、ひと (32)、センセイ (12)、ほう (10)	丨 (58)、・ (44)、・ (30)、× (30)、 (22)、尸 (20)、幺 (20)、丁 (19)、口 (16)、 夕 (15)、厶 (14)、弓 (13)、卩 (10)、く (10)、ㄣ (10)、村 (11)、貓 (12)、書 (13)
形容詞	いい (29)	
副詞	いっしょ (10)	一起 (10)
動詞	かく (11)、くる (12)、いく (21)、かまう (12)	聽 (18)、見 (10)、寫 (13)、去 (22)、沒 關係 (11)
感動詞		對 (10)
助動詞	てくる (17)	
助詞		之 (11)

難しい単語を片仮名で表記する現象は、先行研究でも取り上げられた。劉（2018）では、中国語（簡体字）では表記の手段は漢字とローマ字しかないため、片仮名表記を中国語に再現できないと述べられている。しかし、本稿で調査対象にした繁体字では、漢字の発音を表記するのに、音声記号という手段を使っている。[表 7] で、中国語の特徴語「メ」

「尸」「幺」などがそれである。これを用いて、日本語の片仮名と類似した効果を得ることができる。(57) (56) がその例である。しかし、それでも平仮名のみで表記するという効果を得ることはできない。

(57) a. スウガクをおしえている (J-1, p.84)

b. 你在教尸メ` Tロセ`。(C-1, p.59)

(58) a. ヘイキンリツはしっている (J-1, p.87)

b. 我知道ターム` 4ロフ カロ`。(C-1, p.62)

また、原作では片仮名表記だが、訳者の判断でそのまま漢字に訳した例がある。(59) (60) の名詞「ホン」は日本語では特徴語であるが、中国語では何の特徴もない表現になっている。

(59) a. じゃあ、なにかホンをよんで (J-1, p.454)

b. 那你讀什麼書吧。(C-1, p.344)

(60) a. ホンをよむかおはなしをしてくれる (J-2, p.268)

b. 你要讀書還是說故事給我聽。(C-1, p.199)

[表 7] には上がっていないが、もう 1 つの事例を挙げる。日本放送協会という組織に関して、ふかえりの発話はすべて (61) (62) の「エネーチケー」であるのに対し、ほかのキャラクターはほとんど (63) (64) の「NHK」という表記に統一されている。作者はこの違いを意図的に使い分けているように思われる。中国語訳でも、ふかえりの「n h k」と、ほかのキャラクターの「NHK」と、小文字と大文字で区別されている。

(61) a. そう。エネーチケーのひと (J-3, p.68)

b. 對。n h k的人。(C-3, p.52)

(62) a. エネーチケーのひとがまたやってきた (J-3, p.110)

b. n h k的人又來了。(C-3, p.84)

(63) a. NHKの集金人? (J-3, p.51)

- b. NHK的收費員嗎？ (C-3, p.67)
- (64) a. 僕はNHKから何かを盗んでいるわけじゃない (J-3, p.53)
- b. 我也沒從NHK偷什麼。 (C-3, p.68)

ほかに観察されたふかえりの特徴語として、(65)～(68)の「かまわない」「そう」が挙げられる。これらはすでに見てきた天吾の「じゃあ」「つまり」と同じく、役割語・キャラクター言語というより口癖に近いものだが、別のキャラクターに比べて明らかに使用率が高いことから、作者が意図的にふかえりにこの言葉を使させた可能性がある。これらの表現は助詞のような機能語ではなく、実質的な意味をもっているため、訳しやすいものが多い。以下の例では該当表現がいずれも中国語に翻訳されている。

- (65) a. かまわない。もしそれができるのなら (J-2, p.343)
- b. 沒關係。如果可能的話。 (C-2, p.257)
- (66) a. ベッドにはいってかまわない (J-1, p.465)
- b. 到床上躺下沒關係。 (C-1, p.353)
- (67) a. そう。あなたはそのホンをよんだ (J-1, p.461)
- b. 對。你讀過這本書。 (C-1, p.351)
- (68) a. そう。エネーチケーのひと (J-3, p.68)
- b. 對。n h k 的人。 (C-3, p.52)

ふかえりは、ほかのキャラクターとは異なり、彼女の特徴的な表現は役割語というより、一種のキャラクター言語に近い。表現手段も代名詞・文末表現ではなく、表記を用いる。日本語には漢字・平仮名・片仮名・ローマ字の4種類の表記手段があるのに対し、中国語(繁体字)には漢字・発音記号・ローマ字の3種類しかない。片仮名表記は発音記号で対応できているが、平仮名表記までは対応しきれなかった。

6. まとめと今後の課題

以上見てきたように、日本語におけるキャラクターの特徴的な表現は人称代名詞・感動詞・文末表現に現れやすいという先行研究の指摘を再確認できた。人称代名詞に関して、両言語において互に対応する言語形式は存在するが、中国語では二人称代名詞「您」と三人称代名詞「傢伙」以外はほとんど役割語的な要素が含まれていない。特に一人称代名詞「僕」「俺」「私」はすべて「我」と訳され、その違いは訳本では分からなくなっている。感動詞と文末表現に関して、終助詞「わ」「かしら」はそれに対応する中国語がないため訳文に反映されていないが、感動詞「ねえ」や終助詞「ね」「よ」といった女性キャラクターの言語的特徴は「嘿」「喲」のように忠実に再現されている。なお、表記に関して、中国語の簡体字では表現できない片仮名表記を、繁体字では発音記号で表せることも新た

に分かった。全体的に、男性キャラクターよりも女性キャラクターのセリフのほうが原作のイメージに近いと思われる。

本稿では、特化係数が2以上であるものを中心にキャラクターの特徴語を見てきたが、これで明らかにできたのは山口（2007）の表現を借りれば、あくまでも「足し算式」の特徴的な表現である。もし同じ方法で特化係数が0.5以下のものを見れば、いわゆる「引き算式」の特徴的な表現も得られると考えられる。また、今回は語形レベルで特徴量を計算したのだが、語種や活用形など、先行研究では言語的特徴になりうる要素については考察できなかった。最後に、言語構造の違いにより、形態素解析は両言語において完全に一対一の対応関係をなしているわけではない。例えば品詞・単位切りの基準が同じでないことがそれである。これらの問題点を今後の課題にする。

参考文献

- 河崎みゆき（2011）「中国の若い女性のことばを探る—中国男女口癖調査を中心に—」『日本語とジェンダー』第11号
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏（編）（2007）『役割語研究の地平』くろしお出版
- 金水敏（編）（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版
- 金水敏（編）（2014）『<役割語>小辞典』研究社
- 金水敏（2016）「役割語とキャラクター言語」『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ報告論集』私家版
- 金水敏（編）（2018）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（1）』大阪大学大学院文学研究科
- 国立国語研究所（1997）『テレビ放送の語彙調査Ⅱ—語彙表—』国立国語研究所
- 山口治彦（2007）「役割語の個別性と普遍性—日英の対象を通して—」金水敏（編）『役割語研究の地平』くろしお出版
- 劉翔（2018）「小説『海辺のカフカ』におけるキャラクターの言語表現及び翻訳の分析—中国語版の訳本との対照を通して—」金水敏（編）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（1）』大阪大学大学院文学研究科

調査資料

- 村上春樹（2009a）『1Q84 BOOK1』新潮社
- 村上春樹（2009b）『1Q84 BOOK2』新潮社
- 村上春樹（2010）『1Q84 BOOK3』新潮社
- 村上春樹（著）、頼明珠（訳）（2009a）『1Q84 BOOK1』時報出版
- 村上春樹（著）、頼明珠（訳）（2009b）『1Q84 BOOK2』時報出版
- 村上春樹（著）、頼明珠（訳）（2010）『1Q84 BOOK3』時報出版

ナカタさん（『海辺のカフカ』）の変わった話し方は

英語でどのように翻訳されるのか*

山木戸 浩子
(藤女子大学)

1 はじめに

日本語で書かれた文学作品が他言語に翻訳される際、もしそれが（例えば日本語と英語のように）二言語間における言語・文化の距離がかけ離れていればいるほど、語・句・文法・テキスト構成など、さまざまなレベルにおいて完全に一対一の対応をしておらず、翻訳者の解釈と判断が重要になってくる。また日本語は、地域変種や社会変種など、言語変種が豊かな言語であり、作品の作り手は登場人物のキャラクター形成のために言語変種を意図的に使用することがある。金水(2003)は、「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる」と、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる」と、その言葉づかいを「役割語」と呼[ん]でいるが(p. 205)、フィクションの台詞に役割語を使用すると、その「話し手の属性を受け手にただちに伝えられる […]」(金水 2016, p. 5)という利点がある。例えば、ある登場人物が関西弁あるいは男ことばを話せば、その話者は「関西の出身者」「男性」という人物像にそれぞれ結びつけられ、よって<関西弁><男ことば>は役割語である。(本稿では、金水(2003, 2014)に倣い、こういった役割語のラベルを山カッコに括って示す。)このように、役割語は話し手の特定の人物像(金水(2016)では、上に挙げた「年齢、性別、職業、階層」に加え、居住地域、国籍・民族などの「社会的・文化的グループに対応するもの」に限定)とステレオタイプ的に結びつけられる話し

* 本稿は、山木戸(2018)の拡張版である。(山木戸(2018)は、金水敏氏が2016年に立ち上げた「村上春樹翻訳調査プロジェクト」の一貫として書いた報告書の草稿を大幅に削り、加筆・修正を施したものである。)本稿を書くにあたり、Philip Gabriel 氏に大変貴重な情報をいただいた。金水敏氏、河原清志氏、千葉修司氏、Dane Hampton 氏には有益なコメントやご助言をいただいた。心から感謝の意を表したい。また、本稿の一部を日本通訳翻訳学会第18回年次大会(2017年9月)、役割語研究会(同年11月)で発表した際に質問やコメントをくださった聴衆の方々、アンケート調査にご協力いただいた12名の英語母語話者の方々にもお礼を申し上げる。

方であり、その知識はその言語共同体の多くの話者によって共有されていなければならない(ibid.)。一方、登場人物の中には、特徴的な話し方をするが、その話し方は役割語ではない場合がある。例えば、話し手の社会的属性とステレオタイプの結びつきが認められるものの、言語共同体のほんの一部の受容者にしか認知されていない話し方や、子ども向けのアニメーションに登場する(本来ことばを話すはずのない)動物のキャラクターが話す特定の言語変種などである。このような役割語とは言えないキャラクター特有の話し方の類型は「キャラクター言語」と呼ばれ、本稿でも「役割語」と「キャラクター言語」を区別して扱う(「役割語」と「キャラクター言語」の違いについての詳細は、Kinsui and Yamakido (2015)、金水(2016)を参照のこと)。

翻訳において、「さまざまな言語変種をどう訳出するかは、実践においては大きな困難を伴[う]」(吉田・坪井 2013, p. 167)といい、その困難さについてはこれまでに Nida (1972)、Yau (2014)、Colina (2015)等によって指摘されてきた。日本語の標準的ではない言葉づかいが話し手のキャラクター形成に使用されているのであれば、翻訳者は作り手の意図、受容者に与える印象や及ぼす効果は何であるのか、またその変種を使っているということが社会的にどのような意味を持っているのかを理解しなければならず、翻訳者の解釈と判断がいかに重要であるかがわかる。本稿では、ケーススタディとして、村上春樹によって2002年に書かれた長編小説『海辺のカフカ』に登場するナカタさんの特異な話し言葉に焦点を当て、そこに観察される特徴が英語翻訳版 *Kafka on the Shore* (2005)の翻訳者である Philip Gabriel 氏によって英語でどのように対応されているかを考察する^{1 2}。村上春樹の作品は世界の数多くの言語に翻訳されており、特定の言語における具体的な訳出の方法の分析や特定の作品の言語間の翻訳の比較など、日本語の文学作品の他言語への翻訳の質について議論するのに適していると思われる。特に、『海辺のカフカ』には標準的ではない言葉づかいをする人物が複数登場し、言葉づかいがそれぞれの人物の描写にも関わっているが、とりわけナカタさんの話し言葉に観察される特徴は、役割語とキャラクター言語の2つのタイプに分けることができる。初老の男性らしい言葉づかい、敬語、自称詞としての苗字の使用、意図的なカタカナ表記の使用など、翻訳する上で困難であると思われるような要素も多数観察されるが、Gabriel 氏のどのような解釈と判断でもって、ナカタさんの話し言葉の特徴は英語にどう翻訳されているのであろうか。特に主語の人称の問題の対処については、Gabriel 氏へのインタビューも紹介する。

¹ 『海辺のカフカ』は、上巻・下巻に分かれ、全部で49章から成り、「物語は「僕」の奇数章と、ナカタさんの偶数章の2つがパラレルのように進行していく」(洋泉社編集部(編) 2013, p. 69)。

² 金水(2016)において、ナカタさんは「象徴的な話し方をするキャラクター」として扱われている(pp. 11-12)。

2 分析対象の登場人物の説明

まず「ナカタさん」とは一体どのような人物なのか。洋泉社編集部(編)(2013)では(1)のように紹介されている。

- (1) ナカタさん：偶数章の主人公。60歳すぎ。子供の頃、疎開先で「お椀山事件」に遭遇し、以来読み書きの能力と記憶を失うが、それ以前は秀才だった。現在は都から補助を受けながら暮らしている。猫と会話ができるため「猫探しの名人」に。佐伯さんと同じく影が半分しかない。すこし風変わりなしゃべり方をし、ウナギが好物。亡父は大学で金融論を教える先生、2人の弟は伊藤忠と通産省に勤めている。(p. 69)

(1)の中で特に言語能力・言語運用に関わる点に着目すると、ナカタさんは子どもの頃に起きたある出来事を境に読み書きの能力と記憶を失い、猫と会話ができ、「すこし風変わりなしゃべり方」をするということである³。そのしゃべり方については、例(2)に示すように、ナカタさんと会話をする人間や猫はたいていそのような印象を持ち、またナカタさん自身もそのことを自覚しているようである。(2a)のオオツカさんは猫、(2b)のコイズミさんと(2c)の星野青年は人間である。例における下線は引用者による。これ以降も同様である。)

- (2) a. 「しかし、あんたは人間にしても、いささか変わったしゃべり方をするね」とオオツカさんは言った。

「はい、みなさんにそう言われます。しかしナカタにはこういうしゃべり方しかできないのです。普通にしゃべりますと、こうなります。頭が悪いからです。昔から頭が悪かったわけではないのですが、小さいころに事故にあいまして、それから頭が悪くなったのです。字だってかけません。本も新聞も読めません」

(村上 2002a, p. 79)

³ 物語の中で、ナカタさんは自身について度々「頭の悪い人間」(村上 2002a, p. 78)、「[…]とくべつに頭が良くないのです」(ibid., p. 359)などと言っているが、一方で「ナカタは頭がよくありませんが、頭がおかしいわけではありません」(村上 2002b, p. 45)とも言っている。また、彼は何かについて真剣に考えるとき、手のひらで頭を撫でる、さする、こする、といったジェスチャーをする(村上 2002a, p. 131, p. 138, p. 143, p. 244, p. 318; 村上 2002b, p. 46, p. 127, p. 132, p. 142, p. 237 など)。(参考までに、森淳一(監督)『ランドリー』(2002)という映画の中で、主人公のテル(演: 窪塚洋平)は、子どものときに起こった事故が原因で軽度の知的障がいを持っているという設定であるが、彼もまた考える際に、手のひらで頭を何度か軽く叩いたり、撫でたりするようなジェスチャーをする。)

- b. コイズミさんの奥さんはナカタさんに感謝した。[…] 風変わりな老人だし、奇妙なしゃべり方をするが、猫探しとしての評判は高いし、悪い人には見えない。

(ibid., p. 205)

- c. そもそも星野青年がナカタさんに興味を持ったのは、彼の風貌やしゃべり方が死んだじいちゃんに似ていたからだった。でもしばらくすると、じいちゃんと似ているという印象はどんどん薄れていき、青年はむしろナカタさんという人間そのものに好奇心を抱くようになった。ナカタさんのしゃべり方はたしかにかなりずれていたし、しゃべる内容はそれ以上にずれていた。しかしそのずれ方には、何かしら人の心を引きつけるものがあった。

(村上 2002b, p. 6)

さらに、ナカタさんの「すこし風変わりな話し方」は読者にも強い印象を与えるようである。実際に、『海辺のカフカ』公式ホームページでは、村上春樹氏に「登場人物の中ではナカタさんが好きです。あの独特な言葉づかいも伝染してきますが、[…]

(村上 2003, p. 129)、「私はどうもナカタさんが気に入ったようで、読んでいるうちに彼の口調が癖になってしまいました」(ibid., p. 168)と報告する読者からのメールが紹介された⁴。

ナカタさんの会話は、全49章のうち16の章に出てくるが、発音は明晰で、文法的な間違いは見られない。確かに彼は「長い説明をするのがとりわけ苦手」(村上 2002a, p. 285)であり、「きわめて限定された語彙の中で生きて」(ibid., p. 371)いるのであろう。また、抽象的な概念を理解することに難しさを感じており(ibid., p. 365) (e.g. 「架空の痛み」(ibid., p. 211)、「投資」(ibid., pp. 370-371)、「無限」(村上 2002b, p. 128))、ことわざも文字通りにしか理解できない⁵。しかし、彼の発話自体は意味的に問題がないように思われる。それでは、ナカタさんの話し言葉のどのような点が特徴的であり、また、周りの人間や猫、そして読者に「すこし風変わりなしゃべり方」をするという印象を与えるのか。

⁴ 『海辺のカフカ』公式ホームページは、2002年6月から2003年2月14日までの期間限定でオープンした。村上春樹氏は読者から感想や質問を募り、そのうちのいくつかに返事を書き、そのやり取りがアップロードされた。そのやり取りは村上(2003)に収められている。

⁵ ナカタさんは、星野青年が会話の中で引用したことわざのうち、「聞くはいつきの恥、聞かぬは一生の恥」(村上 2002b, p. 44)、「毒くわば皿まで」(pp. 209-210)、「犬も歩けば棒にあたる」(p. 237)の3つについて自分の考えを述べている。例えば「毒くわば皿まで」は「悪い事をやり出した以上は、どうせ罰せられるのだから、とことんまでやっしまおう」という意味だが(『新明解国語辞典 第七版』(2012); ただし、この辞典では「毒を食(ら)わば皿まで」となっている)、ナカタさんは星野青年に、「しかしホシノさん、お皿なんかを食べたら人は死んでしまいます。歯にもよくありませんし、喉も痛いです」(村上 2002b, p. 210)と言っている。参考までに、柴田、他(2007)は、脳に障がいを持つ人たちの中には隠喩を字義的にしか解釈できないケースがあることを報告している。

3 ナカタさんの話し言葉の特徴

ナカタさんの話し言葉の特徴は主に2つのタイプに分かれる。1つ目は、ナカタさんの人物像とステレオタイプ的に結びつく特定の言葉づかい（「役割語」）、2つ目は彼と話した人間や猫、そして読者が感じる「すこし風変わりなしゃべり方」を作り出す言葉づかい（「キャラクター言語」）である。

3.1 ナカタさんの台詞に観察される役割語

まず、ナカタさんの台詞に観察される役割語、つまり彼の人物像（属性）とステレオタイプ的に結びつく言葉づかいを考察する。偶数章の主人公であるナカタさんの会話は第6章で初めて登場するが、この章は「初老の男」が猫に「こんにちは」と話しかけるところから始まる。

(3) 「こんにちは」とその初老の男が声をかけた。

猫は少しだけ顔をあげ、低い声でいかにも大儀そうに挨拶をかえした。年老いた大きな黒い雄猫だった。

「なかなか良いお天気でありますね」

「ああ」と猫は言った。

「雲ひとつありません」

「……今のところはね」

「お天気は続きますか？」

「夕方あたりからくずれそうだ。そういう気配がするな」と黒猫はもぞもぞと片足をのぼしながら言った。それから目を細め、あらためて男の顔を眺めた。

男はにこにここと微笑みながら猫を見ていた。

猫はどうしたものかと少しのあいだ迷っていた。それからあきらめたように言った、「ふん、あんたは……しゃべれるんだ」

「はい」と老人は恥ずかしそうに言った。そして敬意を示すように、よれよれになった綿の登山帽を頭からとった。「いつでも、どのような猫さんとでもしゃべれるというわけではありませんが、いろいろなことがうまくいけば、なんとかこのようにお話をすることができます」

「ふん」と猫は簡潔に感想を述べた。

(村上 2002a, pp. 76-77)

初老の男が猫と会話をしている。しかも、世間話の定番である天気の話から会話を始めている。なんともおかしく、不思議な光景である。猫は会話にあまり積極的に参加してお

らず、かなりぶっきらぼうな態度である。一方、その男は猫と対照的であり、「にこにここと微笑みながら」「恥ずかしそうに（言った）」「敬意を示すように、よれよれになった綿の登山帽を頭からとった」などの描写からも分かるように、礼儀正しく、控えめな優しい気持ちで猫に接しているのが感じ取れる。この違いは言葉づかいにも表れており、猫は「～だ」などの非丁寧体を使っているのに対し、男は「～ます」の丁寧体を使っている。実は、この会話(3)のすぐ後で、その「初老の男」の名前が「ナカタ」であることが分かる。「ナカタ」という名前は、この1つ前の偶数章（第4章）の最後の方に、「ナカタサトル」というフルネームで出てくる。第4章は「お椀山事件」（(1)参照）についての記述で、1944年11月、ある教員の引率のもと、山梨のある山奥（通称「お椀山」）に野外実習へ出かけた16名の児童全員が昏睡したとある。その16名の児童の中に「どうしても意識を回復できなかった男の子」がおり、その男の子の名前が「ナカタサトル」であったと書かれている。）読者はここで、その男の子、ナカタサトルが「事件」の後どういう経緯を経てだかわからないものの、現在もなお生きており、年齢は初老の域に達していることを知る。また、小学生のときに彼の身に起こったことを考えると、猫と会話ができるという不思議な能力を持っているのもなんとなく受け入れてしまう。ナカタさんとこの猫（会話の途中、ナカタさんに「オオツカさん」と名付けられる）の会話はこの章の最後まで続くが、彼に関する多くのことはオオツカさんとの会話から知ることになる⁶。(1)に述べられたような情報も、この章ではほぼカバーされている。

3.1.1 ナカタさんの年齢と結びつく役割語（＜老人語＞）の使用

まず、ナカタさんの年齢とステレオタイプ的に結びつく特定の言葉づかい（役割語）について考察する。彼は60歳過ぎであり（(1)参照）、これは第6章の冒頭で彼が「初老の男」として登場した後（(3)参照）、章の後半で本人が「しかしオオツカさん、今となりましてはナカタはもう60をとっくに過ぎました。[…]」（村上 2002a, p. 86）と言っていることからわかる。それでは、彼の話し言葉に「初老（の男）」らしい特徴は観察されるのかというと、作品を通して俗語や若者言葉が使われることはなく、いかにも老人らしい言葉づかい（金水（2003, 2014）に倣い、＜老人語＞と呼ぶ）が僅かに観察される。「腰をおろす」（cf. 座る）（村上 2002a, p. 77）、「いやいや」（ibid.）、「いささか」（cf. 少し, ちょっと）（ibid., p. 72, p. 133;

⁶ ナカタさんは、話しかけた猫に名前がない場合は、人間の姓の名前をつけ、「[姓]+さん」と呼ぶ（「オオツカさん」以外には、「カワムラさん」（10章）、「オオカワさん」（14章）など）。これについてナカタさんは、「名前がないと覚えるのに困[る]」から、と言っている（村上 2002a, p. 78）。それぞれの猫がなぜ「オオツカさん」「カワムラさん」などと名付けられたのかは特に理由がないようである。参考までに、ナカタさんに話しかけてきた獰猛な性格の巨大な黒い犬に対しては名前をつけていない。「名前をつけようという気持ちにもなれなかった」と言っている（ibid., p. 211）。

村上 2002b, p. 13)、「がんらい／元来」(cf. もともと) (村上 2002a, p. 204, p. 221; 村上 2002b, p. 202)、「皆目」(cf. 全く) (村上 2002a, p. 325, p. 361; 村上 2002b, p. 3, p. 43)などの語句に加え、以下(4)に示すように、会話の中に打ち消しの助動詞「ない」に相当する<老人語>「ん」が現れている (e.g. 「おらん」「わからん」「ならん」)。「おらん」は動詞「いる」に相当する<老人語>「おる」に「ん」が結びついた形である。詳細は金水(編)(2014)を参照のこと)。(例(4)のそれぞれの引用の後ろには、括弧に出典が記されており、「→」は発話の聞き手を指す。例えば、(4a)の「→ 星野さん(人間)」は、「ナカタさんから星野さん(人間)に向けられた発話」であることを意味する。これ以降も同様である。)

- (4) a. 「それが、ナカタもよく覚えておらんのです。どこかずっと遠いところにて、[...]」
(→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 42)
- b. 「[...] ナカタもまだそんなものを開けたことはありませんので、よくわからんのです。開けてみないことにはわかりません」
(ibid., p. 143)

ただし、ナカタさんは否定の標準形「ない」も使っており (e.g. 「いない」「わからない」)、彼の会話が出てくる16の章を通して、「ん」はほんの6箇所しか観察されないことから、「ない」の方がはるかに優勢であると言える。ナカタさんが<老人語>と標準形を使いわけていたのか、つまり著者である村上春樹氏がある特定の場面で<老人語>を意図的に使ったのかどうかはわからない⁷。

3.1.2 ナカタさんの「礼儀正しさ」と結びつく言葉づかい（敬語）の使用

次に、ナカタさんの敬語の使用について考察する。作品中に「ナカタさんはまじめで礼儀正しく、いつもにこにこしているのが、近所の奥さんたちのあいだではとても評判がよかった。」(村上 2002a, pp. 203-204)という描写が出てくるが、作品を通してナカタさんは一貫して敬語を使っており、彼の礼儀正しい印象と結びつく。(5)-(7)に示すように、ナカタさんは会話の相手が人間であれ猫であれ、聞き手に対して敬意を表す「～です」「～ます」「～であります」を使用している。

⁷ 面白いことに、ナカタさんが<老人語>「ん」を使うのは全て下巻に入ってからであり、6箇所のうちの5箇所は星野さん(人間)との会話、残りの1箇所は佐伯さん(人間)との会話の中に出てくる。ナカタさんにとって星野さんは唯一「お友だち」と言えるような存在であり(村上 2002b, p. 286)、一方、佐伯さんはナカタさんと同じく影が半分しかなく(ibid., p. 289; 本稿(1)も参照)、二人はいわば分身のような存在であると言える。

- (5) a. 「実を言いますと、鯖はナカタもずいぶん好きです。もちろんウナギも好きですが」
 (→ ミミさん(猫); 村上 2002a, p. 137)
- b. 「お願いです。[…] これ以上続けば、ナカタはおかしくなってしまうそうです。ナカタはもうナカタではないような気がするのです」
 (→ ジョニー・ウォーカー(人間); *ibid.*, p. 256)
- (6) a. 「はい、みなさんにそう言われます。[…] 普通にしゃべりますと、こうなります。[…] 字だってかけません。本も読めません」 (→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 79)
- b. 「はい。そうではないかと、ナカタも思います。ナカタは何をするにもほかの人より時間がかかりますので」 (→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 131)
- (7) a. 「[…] ナカタが今ふと思いついただけであります。名前がないと覚えるのに困りますので、適当な名前をつけただけであります。名前があるとなにかと便利なのであります。[…]」 (→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 78)
- b. 「とてもおいしいうどんであります」 (→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 17)

また、ナカタさんの話し言葉には、丁寧語、尊敬語、謙譲語の語彙的な形式も観察される(e.g. 丁寧語「おる」、尊敬語「いらっしゃる」「お目にかかる」「召し上がる」、謙譲語「申す」「いたす」「存じ上げる」)⁸。ナカタさんの一貫した敬語の使用は彼の礼儀正しい印象と結びついており、同時に読者にとって彼の人物理解につながっているのである。

3.2 ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする特徴

ナカタさんの敬語の使用は、彼の礼儀正しさを考えるととても自然である。だが、彼は猫を含めどんな相手に対しても敬語を使うため、「すこし風変わりなしゃべり方」をするという印象を与えてしまうのか。実はナカタさんの話し言葉には、彼のしゃべり方に「すこし風変わり」な印象を与える特徴が大きく4つ観察される。そして、これらの特徴はどれもナカタさんの人物像とステレオタイプ的に結びつく言葉づかい(つまり「役割語」)ではなく、ナカタさん限定のキャラクター言語である。確かにナカタさんには風変わりなところがあり、実際に((2b)にも示されるように)「風変わりな老人」であるという印象を抱いて

⁸ ナカタさんはごくたまに尊敬語の文法的な形式も使う。尊敬の「られ」の形が10箇所、「お～になる」の形が2箇所確認される。

- (i) a. 「[…] テレビの中でみなさんの話される言葉が速くて、ナカタはそれにとってもついていけないのです。[…]」 (→ ミミさん(猫); 村上 2002a, p. 140)
- b. 「もし空が晴れておりまして、念のため傘をお持ちになった方がいいです」
 (→ お巡りさん(人間); *ibid.*, p. 290)

いる登場人物もいるが、これらの4つの特徴のうち「風変わりな」性格とステレオタイプの結びつくものは1つもない。一方、読者（そして登場人物）は、ナカタさんの社会的属性と直接結びつかないこれらの言葉づかいの特徴1つ1つから彼のキャラクターについて新たな印象を感じ取り、それは彼の人物理解へとつながっている。同時に、これらの4つの特徴の組み合わせが彼の言葉づかい全体になんとも風変わりな印象を作り出しているのである。

3.2.1 「であります」の使用

1つ目の特徴は、上の3.1.2で挙げた「～であります」の使用である（例(7)とあわせて、以下の(8)も参照のこと）。

- (8) 「ゴマちゃんのことでありますが、ようやくひとつ情報が入りました。カワムラさんという方が、2丁目にあります塀に囲まれた広い空き地で、何日か前にゴマちゃんらしき三毛猫の姿を見かけたそうであります。ここからはふたつばかり大きな道路をはさんでおりますが、年齢もガラも首輪の様子も、ゴマちゃんと同じでありました。[…]
- (→ コイズミさん(人間); 村上 2002a, p. 249)

金水(編)(2014)によると、「であります」は軍隊のイメージと結びつく語（＜軍隊語＞）として用いられるという。

(9) であります（連語）

名詞・形容詞・副詞などに付き、丁寧語として働く言葉。

▶軍隊の構成員であることを示す場合、階級の低い者が上の者に向かって用いる（＜軍隊語＞）。[用例省略]

▶もとは連語「である」の丁寧体。明治時代にはさまざまなジャンルの文章で用いられたが、次第に同様の丁寧体「です」に取って代わられた。そのため、「である」の丁寧体の中でもより格式ばった表現とみなされるようになり、結果として軍隊という特殊な場で用いる言葉、さらには＜軍隊語＞と結びついたと考えられる（衣畑智秀・楊昌洙 二〇〇七）。[用例省略]

[…]

(pp. 130-131)

2つ目の語釈（「▶」）に書かれているように、「であります」は「である」の丁寧体であり、また「です」に取って代わられたことから、「です」への置き換えが可能である。実際に、(7)と(8)における「であります」は全て「です」へ置き換えることができ、例(10)に示す

ように、この置き換えによって、ナカタさんのしゃべり方の「すこし風変わり」な印象はかなり薄れるである。

- (10) a. 「[…] ナカタが今ふと思いついただけであります。名前がないと覚えるのに困りますので、適当な名前をつけただけあります。名前があるとなにかと便利なであります。[…]
- (=(7a))
- b. 「[…] ナカタが今ふと思いついただけです。名前がないと覚えるのに困りますので、適当な名前をつけただけです。名前があるとなにかと便利なです。[…]

ナカタさんはもちろん軍隊に属しておらず、その経験もない。それにも拘らず、なぜ彼がどんな相手であれ軍隊の中で「階級の低い者が上の者に向かって用いる」「格式ばった表現」の「であります」を頻繁に使うのかはわからない⁹。しかし、これによって、彼が聞き手に対して絶対的な敬意を払っているだけではなく、忠誠を誓い、服従の念を抱いているような印象を読者に与えるのである（住田哲郎氏のご教示による）。

3.2.2 自称詞としての姓「ナカタ」の使用

ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする2つ目の特徴として、自称詞としての姓「ナカタ」の使用を挙げる。彼は、会話の中で（相手が誰であれ）自身のことを「ナカタ」と苗字で呼ぶ。実際に彼の話し方に対して「すこし風変わり」な印象を抱いた猫のオオツカさん、人間の星野さんとの会話から、この特徴が観察される例を紹介しよう。

- (11) (→ オオツカさん(猫))
- a. 「あの、ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？ナカタはいささか歩き疲れましたので」
(村上 2002a, p. 77)
- b. 「それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。」
(ibid., p. 80)
- (12) (→ 星野さん(人間))
- a. 「ナカタも昔、山梨にいたことがあります。戦争中のことですが」 (ibid., p. 336)
- b. 「ホシノさんがそうおっしゃるのであれば、ナカタもそれをやってみようと思います。」
(村上 2002b, p. 44)

⁹ 金水(2016)は、ナカタさんが使用する「～であります」について、「猫を含めて誰に対しても「～であります」という極端な丁寧体で話す」(p. 11)と述べており、特に<軍隊語>と関連づけていない。

日本語のもっとも一般的な自称詞は「私」(一人称代名詞)であり、実際に例(11)(12)における「ナカタ」はどれも「私」に置き換えることができる。例えば、以下の(13a)と(13b)を比較してみると、「ナカタ」の代わりに「私」を使った方が話し言葉としてより自然に思われる。

- (13) a. 「ホシノさんがそうおっしゃるのであれば、ナカタもそれをやってみようと思います。」
(= (12b))
b. 「ホシノさんがそうおっしゃるのであれば、私もそれをやってみようと思います。」

しかし、実際のナカタさんの発話に「私」の使用はほとんど見られない¹⁰。それでは、ナカタさんはなぜ自身のことを「ナカタ」と呼ぶのであろうか。子どもが自身を(「私」ではなく)自分の名前で呼ぶことがあるが、これは名(first name)で呼ぶ場合であり、ナカタ(サトル)さんは「サトル」ではなく、姓の「ナカタ」を使用しているので、異なるタイプとして扱うべきであろう。

実は、自称詞としての自分の苗字の使用も、「であります」と同様、<軍隊語>として考えられている。衣畑・楊(2007)によると、戦争文学『神聖喜劇』(陸軍が舞台)の中では、「一人称として名前を名乗るようになっていく」(p. 183)という。((14)の「東堂」、(15)の「谷村二等兵」はどちらもそれぞれ発話者である。下線は衣畑・楊(2007)による。)

¹⁰ 作品を通して、ナカタさんは会話の中で「私」を4回、「私たち」を1回使用している(自称詞としての「ナカタ」には下線、「私」には波線)。

- (i) a. 「はい。ありがとうございます。ナカタもオオツカさんとお話ができまして、たいへんに嬉しかったです。猫さんと話ができると申しまして、誰とでもこんなふうにするすらと話が通じ合うというものでもないのです。中には私が話しかけますと、ひどく警戒して、黙ってどこかに行ってしまう猫さんもいらっしゃいます。私はただご挨拶しただけなのですが」 (→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 85)
b. 「はい。そうであります。私はナカタと申します。こんにちは」 (→ ミミさん(猫); *ibid.*, p. 131)
c. 「それで」とナカタさんは言う、「そのゴマちゃんを、私が連れてかえることはできませんでしょうか？」 (→ ジョニー・ウォーカー(人間); *ibid.*, pp. 219-220)
(ii) 「よう、ナカタさん」
「なんでしょう、ホシノさん」
「なんだか悪い夢を見ているような気がする」
「はい。しかしもしそうだとすると、少なくとも私たちは同じ夢を見ていることになります」
「なるほど」と星野さんは言った。

(←→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 145)

これらの例でなぜ「私」が使用されているのかはわからない((i-a)と(i-c)の「私」は「ナカタ」への置き換え、あるいは(後続する助詞と共に)省略が可。(i-b)の「私」は(後続する助詞と共に)省略のみ可。(ii)の「私たち」は「ホシノさんとナカタ」等に置き換えが可)。

(14) 「東堂は知らないのであります。」(p. 32) (= 衣畑・楊(2007), (10))

(15) 「お前はどうか？」と詰問した。相手はただちに「はい、谷村二等兵、忘れました」と公認の嘘を叫んだ。(p. 32) (= ibid, (11))

また、同じような一人称の使用は、『機動戦士ガンダム』にも観察されるようである。

(16) 「アムロ曹長！発進します！」(p. 22) (= ibid, (12))

衣畑・楊(2007)は、(14)-(16)の例に見られるような自称詞としての自分の姓(あるいは「自分の姓+階級」)の使用は、「軍隊語の特徴として認められるかもしれない」と述べており(p. 183)、元々は軍隊の中で自分よりも階級が高い者を対象とした話し言葉で観察されるという。「であります」と併せて、自称詞として姓「ナカタ」を使用することによって、彼がどんな相手にも絶対的な敬意と忠誠心、服従の念を抱いているような印象が強くなるのである^{11 12}。

¹¹ 衣畑・楊(2007)によると、<軍隊語>の自称詞としてもっとも一般的なのは「自分」であるというが、ナカタさんの発話の中にこの用法の「自分」は観察されない。(「自分」自体は8回出てくるが、どれも「ナカタ」に置き換えることはできない。)

¹² ただし、村上春樹氏がナカタさんに自称詞として自身の姓を使わせるにあたり、軍隊のイメージを抱いていたかどうかというと、そうではない可能性が高そうである。『海辺のカフカ』公式ホームページにおいて、村上春樹氏はある読者と以下(i)のようなやり取りをしている(村上 2003, p. 186)。

(i) Mail no. 491

[…]

物語の中で、ナカタさんが自分のことを「ナカタは、ナカタは」とよくおっしゃっていました。その言い方から『ねじまき鳥クロニクル』の牛河さんの「不肖、牛河が」を思い浮かべてしまい、なぜか頭から牛河さんが離れません。

村上さんもご自分のことを「村上は」と、このサイトでおっしゃっています。なにかそこにブームみたいなものがあるのでしょうか。それともテクニック(または呪文?)なのでしょう。

[…]

Reply to 491

こんにちは。そういうのって村上はべつに変だとは思わないんですが、変ですかねえ。よくわかりません。

でも女の子ってよくそういうの言うじゃないですか。「そういうの見たとき、恵子はさびしくなっちゃうんだ」とか。僕はいい年をした男なので「ハルキは思うんだけどさ」とか言えませんが、「村上は思うのですが」くらいでいいじゃないですか。

3.2.3 <幼児語>「～さん」の使用

これまで見てきたナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする特徴2つは、どちらも軍隊の中で下の位の者が使うイメージと結びつくものであるが、彼の話し言葉は単に服従的で堅苦しく形式ばっている印象を与えない。これは彼の発話の内容や描写から伺い知ることのできる人柄ゆえなのであろうか。その可能性は十分考えられるが、それだけではない。3つ目の特徴として、「～さん」の使用を挙げる。「さん」は「様」より親しみの気持を含めて、人の名前や人を表す語などのあとにつけて（軽い）敬意を表す「接尾辞」であるが（『新明解国語辞典 第七版』（2012））、彼は発話内で対称詞や呼びかけ、三人称として「[姓] +さん」を使う（e.g. 「オオツカさん」（猫）、「星野さん」（人間））。これは、彼の礼儀正しさを考えると、3.1.2で見た敬語の使用と同じく、自然であるように思われる。しかし、彼が「さん」をつける対象には、動物名（e.g. 「猫」「犬」）と自然・物体名（e.g. 「雷」「石」）も含まれており、同様に対称詞や呼びかけ、三人称として使われている。

- (17) a. 「といたしますと、猫さん_{<対称詞>}はどこかのお宅で飼われているんじゃないんですね」
(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 77-78)
- b. 「えーと、それで、あんたは……ナカタさんっていうんだね」
「そうです。ナカタと申します。猫さん_{<呼びかけ>}、あなたは？」
(←→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)
- c. 「ナカタはただ猫さん_{<三人称>}の行方を探しているだけのものです。[….]」
(→ 犬; *ibid.*, p. 213)
- d. 「ナカタはこの犬さん_{<三人称>}についてこいと言われまして、ここまでついて参りました。[….]」
(→ ジョニー・ウォーカー(人間); *ibid.*, p. 215)
- e. 「今日は雷さん_{<三人称>}がやってきます」
(→ ナカタさん(独り言)／石(物体); 村上 2002b, p. 129)
- f. 「むずかしい問題であります。ナカタはさっきからずっと石さん_{<三人称>}の話を聞いているのですが、まだそれほどうまく聞き取ることができません。[….]」
(→ 星野さん(人間); *ibid.*, p. 142)

例えば、同じ「猫さん」でも、(17a)は対称詞として、(17b)は呼びかけとして使われており、どちらも聞き手である猫のオオツカさんを指す。一方、(17c)の「猫さん」は三人称であり、特定の個体（ナカタさんが探している猫）を指している。さらに面白いことに、ナカタさんが使う三人称の「[動物] +さん」「[自然・物体] +さん」は、(18)に示すように、その動物や自然・物体の種類全体（つまり、総称）を指す場合にも使われている。

- (18) a. 「[…] このようにナカタは猫さん<三人称・総称>と少し話ができますので、[…。][…]
 (→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 82)
- b. 「[…] 相手が誰であっても、何であっても、話し合わないよりは話し合った方がいい。俺っちもトラックを運転しているときは、よくエンジンと話をするよ。[…]
 「はい。ナカタもそう考えます。ナカタはエンジンさん<三人称・総称>とは話できませんが、相手が誰でありましても、話し合うのはいいことです」
 (←→ 星野さん(人間); 村上 2002b, pp. 225-226)

例えば、(18a)の「猫さん」は、特定の猫ではなく、「猫」という動物のカテゴリーの総称、猫全体を指している。それでは、ナカタさんは動物や自然・物体に敬称「～さん」を付けることによって、話し言葉にどのような印象を作り出しているのだろうか。

岡崎・南(2011)は、ポピュラーカルチャー作品における「幼児特有の話し方」、つまり幼児の役割語 (<幼児語>と呼ぶ) の語彙タイプ3つのうちの1つとして、「やわらかさをあらわす接頭辞「お」および人以外につく接尾辞「さん・たん・さま・ちゃん」等」を挙げており (他の2つの語彙タイプは「オノマトペ」と「その他」)、「[…] 大人の言葉では接頭辞「お」・接尾辞「ちゃん・さん」等を付加する対象ではないものに用いることで、幼児 (または養育者) の表現のやわらかさ・あどけなさ、対象に対する愛着等を表している」(p. 199) という。一方、実際にナカタさんの話し言葉に見られるのは接尾辞「～さん」のみであり、接頭辞「お」と共に現れることはない。また、接尾辞「ちゃん」や、岡崎・南(2011)のもう一つの<幼児語>の語彙タイプ「オノマトペ」を並行して使用することもない (e.g. 「ニャンちゃん」「ワンワン」)。しかし、一般的な大人であれば動物や自然・物体などの対象に「～さん」を付けたとは考えにくく、彼の話し言葉に「やわらかさ」が加えられているだけでなく、ナカタさんは幼児のように純粋で世間を知らないというような印象を与えるのである¹³。

¹³ ナカタさんが動物や自然物に接尾辞「さん」をつけることによって、それらに対する愛着を表現しているかどうかはわからない。彼にとって猫が特別な存在であることは間違いないが、例(17d)の「犬」に対しては恐怖心を抱いていたのにも関わらず、「さん」をつけている(脚注6も参照のこと)。また、自然物でも「雨」には「さん」をつけておらず(村上(2002a), p. 131, p. 136, p. 204 など)、動物でも「魚」にはつけていない(ibid., p. 291; 村上(2002b) p. 16 など)。その他、「イワシ」「アジ」「ヒル」も同様である。面白いことに、これらは全て物語の中で空から降ってくるものであり、「イワシ」「アジ」「ヒル」についてナカタさんは自分で降らせることができたと言っている(ibid., p. 139 など)。

3.2.4 カタカナ表記の使用

ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする4つ目の特徴として、カタカナ表記の使用を分析する。ナカタさんの発話の中には、漢字で書くのが一般的な語にもカタカナ表記が用いられている場合がある。

- (19) a. 「[...] とくにナカタのお父さんは、もうとっくになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。[...]」

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 79-80)

- b. 「[...] 都バスにはショウガイ者とくべつパスというものを見せれば、なんとかのすることはできますが」

[...]

「じゃあ、何をして暮らしているんだい？」

「ホジョがでます」

(←→ オオツカさん(猫); *ibid.*, pp. 80-81)

(19a)では「金融論」「部長」「通産省」、そして固有名詞「伊藤忠 [会社名]」がカタカナで書かれており、(19b)では(元々カタカナで書かれるべき英語からの借用語「バス」「パス」に加え)「障害(者)」「補助」もカタカナで書かれている¹⁴。それでは、なぜこれらの語にカタカナ表記が用いられているのか。さらに詳しく見てみると、これらは全て漢語の名詞であり、抽象度の高い意味を持つものが多い。一方で、「お父さん」「弟」「二人」「頭」「働いて」「見せれば」などの和語、漢語でも比較的簡単な「大学」「先生」などには漢字が使われている¹⁵。漢字は一字一字が意味を持つのに対して(表語文字タイプ)、カタカナは単に音を表しているにすぎない(表音文字タイプ)。一般的にカタカナ表記が使われるのは外来語であるが、カタカナで書かれたこれらの語の意味・概念はナカタさんにとって“foreign”である—つまりナカタさんは意味を理解しておらず、単なる音の羅列としてしか捉えていないのであろう。

¹⁴ この他にも、「ジョウホウ」(cf. 情報)、「テンテキ」(cf. 点滴)、「シュウサイ」(cf. 秀才)、「ゴイ」(cf. 語彙)、「シアツ」(cf. 指圧)、「スイゾッカ」(cf. 水族館)、「シリツ」(cf. 私立)、「シサンカ」(cf. 資産家)、「ブンジンボッカク」(cf. 文人墨客)などの語がカタカナで書かれている。

¹⁵ 例(19a)における漢語の名詞「専門」は、比較的簡単であるように思われるものの、漢字で書かれている。

また、ナカタさんの話し言葉の中で、漢字で書かれるべきであるのに、カタカナ表記で現れた最初の語は、自身の名前「ナカタ」であった。

(20) 「あの、ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？ナカタはいささか歩き疲れましたので」 (ibid., p. 77)

これについては、ある読者から『海辺のカフカ』公式ホームページを通して「[...] ナカタさんをカタカナ表記にしたのには訳があるのですか？[...]」と質問が寄せられており、村上春樹氏は以下(21)のように返答している。

(21) ナカタさんを漢字ではなくカタカナにしたのは、ナカタさんには字が読めないからです。そんなこと言ったら、ナカタさんはカタカナだって読めないわけなんだけど、まあ気持ちとして。だからナカタさんの話に人名が出てくるときは、だいたい全部カタカナになっていると思います。[...]¹⁶ (Mail no. 114; 村上 2003, p. 72)

また、人名以外にも、「カラスヤマ[東京都世田谷区の地名]」(cf. 烏山)、「フジガワ[地名]」(cf. 富士川)、「トーマイ(高速道路)[地名]」(cf. 東名(高速道路))、「ショウエイソウ[建物名] (東京都中野区野中にあるナカタさんのアパート)」(cf. 松栄(?) 荘)、「コウムラキネットショカン[施設名]」(cf. 甲村記念図書館)などの地名や建物・施設名の固有名詞がカタカナで書かれている。

ただし、これらはいくまでも表記上の違いのため、ナカタさんの話し言葉を視覚的に受容する読者のみを感じる特徴であるということをつけ加えておく。実際に読者はナカタさんの話し言葉の中に漢字に代わってカタカナで表記された語が出てくる度に、彼の言語能力・言語運用(語彙力や識字能力を含む)が一般的な大人とは異なっていることに気づかされるのである^{17 18 19}。

¹⁶ しかし、村上春樹氏の小説には、(識字能力とは関係なく)カタカナ表記の名前を持つ登場人物がたびたび登場する(『ノルウェイの森』(1987)の主人公「ワタナベトオル」など)。

¹⁷ 岡崎・南(2011)によると、マンガに登場する幼児の台詞にも「マンガ特有の表記上の工夫がなされている」という。「幼児のセリフにおいて用いられる漢字は「上・行」等の比較的簡単なもののみであり、ほとんどのセリフはひらがな・カタカナで書かれて」おり、それによって「就学前の「幼さ」を表現する効果があるようである(pp. 205-206)。

¹⁸ カタカナ表記はある語を強調するために使われることがある(英語の書き言葉におけるイタリック体に相当)。確かに、4章で「お椀山事件の後、どうしても意識を回復できなかった男の子」の名前が(漢字ではなく)カタカナで「ナカタサトル」と有標的に示されていることによって、その名前は読者の記憶の中に残りやすい。その後6章でナカタさんが初めて初老の男性として登場したときも(3参照)、すぐに4章の「男の子」と結びつけること

3.3 まとめ

ナカタさんの話し言葉の特徴は、大きく2つのタイプに分けることができる。1つ目は役割語（彼の属性（年齢と礼儀正しさ）とステレオタイプ的に結びつく特徴的な言葉づかい）であり、2つ目はキャラクター言語（彼の話し方を「すこし風変わり」にする特徴的な言葉づかい）である。(22) (23)において、「→」以下には、その特徴の使用によって表現されたナカタさんの印象を記す^{20 21}。

(22) 役割語

- i. <老人語>の使用（ごく僅か）（俗語や若者言葉の使用なし） [→ 初老らしさ]
- ii. 敬語の使用 [→ 礼儀正しさ]

(23) キャラクター言語 [→ 話し言葉に「すこし風変わりな」印象を与える]

- i. 「であります」の使用 [→ 聞き手への敬意、忠誠心、服従の念]
- ii. 自称詞としての姓「ナカタ」の使用 [→ (上に同じ)]
- iii. <幼児語>「～さん」の使用 [→ 純粹で世間を知らない]
- iv. カタカナ表記の使用 [→ 一般的な大人とは異なる言語能力・言語運用]

例えば、以下の(24a)のナカタさんの発話には(23)に挙げた4つの項目が全て観察されるが、特徴的な部分（下線部）を(24b)のようにそれぞれより一般的な形に替えてみると、「風変わり」な印象が随分薄れるのは明らかであろう。

- (24) a. 「はい。行方のわからなくなった猫さんを探すのであります。このようにナカタは猫さんと少し話ができますので、あちこちまわってジョウホウをあつめまして、いなくなった猫さんの行方をうまく探しあてることができます。それでナカタは

ができるのである。

¹⁹ 村上春樹氏は、『海辺のカフカ』公式ホームページにおいて「奇数章と偶数章とでは、漢字の使い方はまったく違ってきます。「カフカ少年」の出てくる章はひらがなが多くなっています。これはもちろん意図的なものです。どのような意図があるのか？そういうことはできればあまり説明したくないような気がします。自分で「こうではないだろうか」などと考えてみて下さい。」と述べている (Mail no. 140; 村上2003, p. 79)。

²⁰ 加藤(2004)によると、『海辺のカフカ』は村上作品の中でも強く大江健三郎作品と類縁を感じさせる作品であり、ナカタさんの話し方は『新しい人よ眼ざめよ』のイーヨーに似ているという (p. 142; 金水(2016)に引用 (p. 11))。

²¹ 金水(2016)は、ナカタさんの奇妙な話し方は、「[ナカタさん]が知的な障害を持っており、それゆえに主人公や他の登場人物と、超自然的な存在とをつないでいく力を持っていることを読者に知らせ[…]」、「[彼]の言語能力・言語運用は、ストーリーの展開にとって大変重要な属性となっている[…]」と述べている (pp. 11-12)。

猫さん探しの腕がいいということになりまして、あちこち迷子の猫さんを探してくれと頼まれるのであります。[…]

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 82)

- b. 「はい。行方のわからなくなった猫を探すのです。このように私は猫と少し話ができますので、あちこちまわって情報をあつめまして、いなくなった猫の行方をうまく探しあてることができます。それで私は猫探しの腕がいいということになりまして、あちこち迷子の猫を探してくれと頼まれるのです。[…]

4 ナカタさんの特徴的な話し言葉の英語翻訳

ナカタさんの話し言葉の特徴は、『海辺のカフカ』の英語版 *Kafka on the Shore* (2005)の翻訳者である Philip Gabriel 氏によって英語でどのように表現されているのだろうか。原著で読者がナカタさんの話し言葉に受けたのと同様の印象や反応を英語版でも引き出すことは重要であり、特に彼の「すこし風変わり」な話し方に関しては、作品中で何度か他の登場人物にそう言われているため(2)参照)、英語においても「すこし風変わり」でなければならないが、実際にその印象は保たれているのだろうか。もしそうであれば、それは具体的にどこからくるのか。この問題について確かめるため、筆者は英語母語話者12名を対象にアンケート調査を実施した。サンプル数のごく少量であるため、7~8割を超えた回答のみを参考にし、以下に示す²²。また、特に自称詞としての姓「ナカタ」の使用の対処については、Gabriel 氏にメールによるインタビューを行った(2015年11月8日)。本セクションでは、ナカタさんの話し方に「すこし風変わりな」印象を与える4つの特徴(23)参照)への対応を中心に分析するが、まず初めに役割語(<老人語>と敬語)(22)参照)への対応を考察する²³。

4.1 役割語への対応

原著におけるナカタさんの話し言葉には、<老人語>(彼の年齢(60歳過ぎ)とステレオタイプの結びつく語句や語法)が(ごく僅かではあるが)観察され、俗語や若者言葉も使われていない。また、ナカタさんの一貫した敬語の使用は、彼の礼儀正しさと結びつ

²² アンケート調査の回答者12名は全て日本の大学で英語を教えている英語母語話者(年齢は38~61歳)であり、母語の内訳は、アメリカ英語5名、イギリス英語3名、カナダ英語4名である。

²³ 本稿では、二言語のテキスト間で翻訳シフトが認められる箇所に「対応」という言葉を当てることとする。これは、W. Koller が「等価」と「対応」を対比させて、「翻訳の科学」と「対照言語学」とを区別している文脈における「対応」とは異なる点、付言しておく(Koller 1979)。

いている。それでは、これらは英語翻訳版でどのように対応されているのであろうか。

4.1.1 <老人語>の使用への対応

アンケート調査の結果によると、英語版におけるナカタさんの発話から感じ取る「老人らしさ」は、主に彼が話す内容からきており、具体的に言葉づかいにはほぼ表れていないという。ただし、英語においても俗語は使われておらず、比較的“old-fashioned” “mature”などのイメージを持つと思われる語句の使用も認められると報告されている。彼の会話が初めて出てくる第6章から例を挙げると、“Hello, there.” (cf. (ST) 「こんにちは」)、 “a (very nice) spell of weather” (cf. (ST) 「(なかなか良い) お天気」)、 “converse” (cf. (ST) 「しゃべる」)、 “Boy oh boy, [...]” (cf. (ST) 「いやいや」) などがある。また、「ありがとうございます」などの感謝の言葉は、典型的な “Thank you so much.” “I’m grateful to you.” などに加え、“Much obliged.” とも訳されている²⁴。

(25) 「はい。どうもありがとうございました」 (→ ミミさん(猫); 村上 2002a, p. 135)
“Much obliged.” [...]. (p. 74)²⁵

比較的古風な語句を意図的に用いることにより、ナカタさんの老人らしさが英語の言葉づかいの中にも表現されているのである。

4.1.2 敬語の使用への対応

アンケート調査の結果によると、英語におけるナカタさんの会話は、「丁寧すぎる」「極端に礼儀正しい」ということはなく、自然な「丁寧さ」「礼儀正しさ」が保たれているという。それでは、この印象は一体どこからくるのか。英語には日本語の敬語に相当するような言語形式が存在しないが、英語における丁寧さ・礼儀正しさを表す典型的な例として、“I beg your pardon.” “Pardon me.” “Excuse me.” などの謝罪の表現 (e.g. (26a)) や、“Thank you so much.” “Thank you kindly.” などの感謝の表現 (e.g. (26b)) があり、ナカタさんは話し言葉の中でこれらを使っている。また、丁寧さの違いが表れる表現形式の一つに依頼があるが、

²⁴ アンケート調査の結果によると、“Much obliged.” はやや古体であり、例えば舞台が150年前の西部劇の映画でカウボーイが使うようなイメージがあるという。また、例えば、日本の戦国時代 (1586年) を舞台とした黒澤明 (監督) の『七人の侍』(1954/2006) に登場する主人公の一人、島田勘兵衛 (演: 志村喬) の台詞「かたじけない」は、英語字幕で “Much obliged.” と訳されている。「かたじけない」は「もったいない、恐れ多い、申し訳ない、ありがたい」の意味をもち、「フィクションの世界では特に、武士や剣士のキャラクターが用いる言葉 (<武士ことば>)」であるという。詳細は金水 (編) (2014) を参照のこと (pp. 69-71)。

²⁵ 英語訳の出典は、Murakami (2005) に拠る。

ナカタさんは直接的な命令文ではなく、“Would you V?” “Could you V?” “Would you mind ~?” など、間接さの程度の高い依頼表現を選択している (e.g. (26c))。相手に許可を求める表現形式も同様に、丁寧度の高い “Do you mind if I V ~?” “Would you mind if I V-ed ~?” が使われている (e.g. (26d))。

(26) a. 「その話はたしかさっき済ませたと思ったけどね」とジョニー・ウォーカーは苦笑しながら言った。

「はい。そのとおりです」とナカタさんは思い出して言った。「そうであります。その話はたしかさっき済ませました。申し訳ありません」

(←→ ジョニー・ウォーカー(人間); *ibid.*, p. 244)

“I thought we’d already settled that,” Jonnie Walker said with a wry smile.

“Yes, we did,” Nakata said, remembering. “That’s correct. We did settle that already.

Pardon me.” (p. 130)

b. 「ありがとうございます」と言って男は猫の隣に腰を下ろした。

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)

“Thank you kindly.” the man said, lowering himself down beside the cat. (p. 43)

c. 「[...] もう一度繰り返していただけますか?」

(→ カワムラさん(猫); *ibid.*, p. 130)

“[...] Would you mind repeating that?” (p. 72)

d. 「それでは猫さんのことを、オオツカさんと呼んでよろしいでしょうか」

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 78)

“Would you mind very much, then, if I called you Otsuka?” (p. 44)

このように、ナカタさんは英語の丁寧な謝罪・感謝の表現、依頼・許可の表現形式を選択・使用しており、実際に英語版の読者もこれらの言葉づかいから彼の礼儀正しさを感じ取るのである。

4.2 ナカタさんの話し言葉に「すこし風変わりな」印象を与える特徴への対応

それでは、ナカタさんの話し言葉の中に「すこし風変わり」な印象をつくり出す4つの特徴 (i) 「であります」の使用、(ii) 自称詞としての姓「ナカタ」の使用、(iii) <幼児語> 「～さん」の使用、(iv) カタカナ表記の使用) ((23)参照) が英語翻訳版でどのように対応されているのかを見ていこう。

4.2.1 「であります」の使用への対応

まず、(i)「であります」への対応について考察する。上の3.2.1で「であります」は「である」の丁寧体であり、「です」への置き換えが可能であると述べたが、英語版において「であります」と「です」がそれぞれ異なって訳されるということはなく、どちらにも *be* 動詞が与えられている。例えば、ナカタさんは相手に同意するとき、よく「そうです」「そうであります」「そのとおりです」「そのとおりであります」と言うが、どれもほぼ一様に “That’s right.” “That’s correct.” “That’s true.” などと訳されている²⁶。アンケート調査の結果によると、英語版の読者は、彼の話し言葉に軍隊の中で位の低い者が話しているような服従的な印象を受けておらず、また「であります」の使用に相当するような表現も観察されていない²⁷。以上、「であります」の使用は、英語翻訳版において直接的な対応が見られないことがわかる。

4.2.2 自称詞としての姓「ナカタ」の使用への対応

次に、(ii)自称詞「ナカタ」の使用について考察する。英語翻訳版においても、自称詞として “Nakata” が使われている。以下の例(27)は猫のオオツカさんとの会話の一部であるが、ここでナカタさんは初めて自身を「ナカタ」と呼ぶ。その後いくつか会話が交わされ、オオツカさんは彼の名前が「ナカタ」であることを確認する。

- (27) 「あの、ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？ナカタはいささか歩き疲れましたので」
[…]
「えーと、それで、あんたは……ナカタさんっていうんだね」
「そうです。ナカタと申します。猫さん、あなたは？」

²⁶ ただし、「そのとおりであります」に限り、3箇所 “right” “correct” の前に強意の副詞 (“absolutely” “exactly” “entirely”) が現れている。

(i) a. 猫は鼻息を立てた。「不便なもんだね」

「そのとおりであります。[…]

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 78)
“You’re absolutely right. […]” (p. 44)

b. 「ところで、あんた、人を殺して血まみれになったというわりには、服に何もついてないですね」

「はい、そのとおりであります。[…]

(←→ お巡りさん(人間); *ibid.*, p. 290)
“Yes, you’re entirely correct. […]” (p. 154)

しかし、これらの副詞の使用は、相手が「正しい」ということを強めているだけであって、決して発話に軍队的な要素を加えているわけではないのである。

²⁷ 英語には軍隊の中で自分より階級・地位が上の人に対して使う言葉として “sir” と “ma’am”/“madam” があり、ナカタさんは実際に話し言葉の中で使用している。ただし、作品を通して計3回のみであり (p. 110, p. 116, p. 352)、それぞれに対応する日本語の発話内に「であります」が観察されないため、「であります」への対応であるとは断言できない。

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)

“Do you mind if **I** sit down here for a while? Nataka’s a little tired from walking.”

[...]

“Um... I take it, then, that you’re Mr. Nakata?”

“That’s right. Nakata’s the name. And you would be?” (p. 43)

(27)に示すように、主語として現れた「ナカタ(は) (いささか歩き疲れました)」は、英語翻訳版でも固有名詞 “Nakata” のまま現れている (該当部分に下線)。だが面白いことに、この一つ前の彼の発話「ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？」には主語の「私」が含まれていないのにも拘らず、翻訳では “I” が付け加えられている (“Do you mind if **I** ...?”)。日本語の文において主語は任意であり、「私がここにちょっと腰をおろしても…」と主語を明示しなかったとしても、文脈から主語が「私」であると特定できる。一方、英語の文においては (命令文を除き) 主語を明示する必要があるため、ここでは “I” を付け加える必要があるのであろう。これ以降のオオツカさんとの会話でも、「ナカタ」は “Nakata” と訳され、原著で主語が現れていないところには “I” が補われている。

(28) a. 「はい。必要のないものはすぐ忘れるものであります。それはナカタも同じであります」
(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)

“[...] It’s easy to forget things you don’t need anymore. Nakata’s exactly the same way.”

(p. 44)

b. 「[...] 駅の名前も読めませんので、切符を買って電車に乗ることもできません。
[...]」
(*ibid.*, p. 80)

“[...] **I** can’t read the names of stations so **I** can’t buy a ticket and take a train. [...]”

(p. 45)

しかし、この規則 (つまり「ナカタ」を “Nakata” に訳し、主語が省略されているところに “I” を補う) が全ての箇所でも適用されているかといえばそうではない。“I” が補われるはずのところ “Nakata” が使われているところもあれば、「ナカタ」が “Nakata” に訳されず、代わりに “I” が使われているところもある。例えば、以下の例 (29a) (29b) のどちらにおいても、「ナカタ」が “Nakata” に訳され (それぞれに一重の下線)、主語が省略されているところに “I” が補われている箇所がある (補われた “I” は太字)。しかし、(29a) では2箇所 “I” が補われるべきところに “Nakata” が使われ (“Nakata” に波線)、(29b) では3箇所 “ナカタ” が “Nakata” に訳されず、代わりに “I” が使われている (それぞれに二重の下線)。

- (29) a. 「はい、みなさんにそう言われます。しかしナカタにはこういうしゃべり方しかできないのです。普通にしゃべりますと、こうなります。頭が悪いからです。昔から頭が悪かったわけではないのですが、小さいころに事故にあいまして、それから頭が悪くなったのです。字だってかけません。本も新聞も読めません」

(ibid., p. 79)

“Yes, everybody tells me that. But this is the only way Nakata can speak. I try to talk normally but this is what happens. Nakata’s not very bright, you see. I wasn’t always this way, but when I was little I was in an accident and I’ve been dumb ever since. Nakata can’t write. Or read a book or a newspaper.” (p. 44)

- b. 「はい。行方のわからなくなった猫さんを探すのであります。このようにナカタは猫さんと少し話ができますので、あちこちまわってジョウホウをあつめまして、いなくなった猫さんの行方をうまく探しあてることができます。それでナカタは猫さん探しの腕がいいということになりまして、あちこちから迷子の猫さんを探してくれと頼まれるのであります。最近では猫さん探しをしない日の方が少ないくらいです。もっともナカタは遠くに出るのがいやなので、中野区の中でしか探さないと決めております。そうしないと今後は逆にナカタの方が迷子になってしまいますので」

(ibid., p. 82)

“That’s correct. I search for lost cats. I can speak with cats a little, so I go all over tracking down ones that have gone missing. People hear that Nakata’s good at this, so they come and ask me to look for their lost cats. These days I spend more days than not out searching for cats. I don’t like to go too far away, so I just look for them inside Nakano Ward. Otherwise I’ll be the one lost and they’ll be out looking for me.” (p. 46)

それでは、英語版において一体どのような基準で“Nakata”と“I”の使い分けが行われているのであろうか。『海辺のカフカ』の英語版(*Kafka on the Shore*)の翻訳者 Philip Gabriel 氏によると、ナカタさんの話し言葉の中で自称詞としての「ナカタ」の使用を英語でどのように扱うのかという問題について、主要な要素が2つあるという(2015年11月8日私信)。

- (30) i. 翻訳においてもナカタさんの話し言葉がすこし風変わりに聞こえる必要がある(物語中で他の登場人物がそうコメントしているため)。
ii. 英語ではナカタさんの話し言葉に一人称代名詞を使う必要がある。

例(27)-(29)に見られるように、ナカタさんは自称詞として“Nakata”と“I”の両方を使っているが、Gabriel氏はこのパターンに決める経緯を以下のように語っている。

In my first drafts I tried translating his speech as it is into English, namely using *Nakata* every time he uses it in Japanese, and even omitting the first person pronoun sometimes. I soon discovered this would make his speech even stranger in English than it is in Japanese, so I was forced by the nature of English to include “I” a lot. To my mind this switching back and forth between *I* and *Nakata* isn’t ideal, but then again using *Nakata* alone for both *I* and *Nakata* makes for very unusual English (and is quite different from the Japanese original because it would greatly increase the number of times I used *Nakata*.) I decided readers would be overly distracted by that. (Too many *Nakatas*.) So--I ended up with a mix of *I* and *Nakata*, which I wasn’t so happy with but 仕方がない。(ibid.)

初稿では、試しに彼の話し言葉をそのまま英語に訳してみた。すなわち日本語版でナカタさんが「ナカタ」を使うたびに“Nakata”を使い、ときに一人称代名詞の省略さえやってみた。しかし、これだと元の日本語より英語のナカタさんの話し言葉の方が奇妙になってしまうことがわかった。そのため、英語の特性に従って、“I”の多用を余儀なくされたのである。私の考えでは、“I”と“Nakata”の2つで行ったり来たりするのは理想的ではないが、“I”と“Nakata”の両方のところに全て“Nakata”を使うと、とても変わった英語になってしまう。(また、ナカタさんの話し言葉で“Nakata”が使われる回数が非常に増え、原著とかなり異なることになる。)これには読者も違和感を感じるだろうと判断した。(“Nakata”が多すぎる。)それで、私は“I”と“Nakata”を混合して使うことにしたのだ。これについては、たいして満足していないが、仕方がない。(拙訳)

原著でナカタさんは自称詞として一人称代名詞の「私」をほとんど使用せず(脚注10参照)、姓の「ナカタ」を使っている。しかし、日本語において主語の明示は任意であるという性質から、彼の話し言葉に「ナカタ」がしつこいほど次々と出てくるというような印象は受けない。一方、英語の文では主語を明示する必要があるが、原著におけるナカタさんの発話が文法的に間違っているわけではないので、明示されていない主語のギャップを何かで埋めなければならない。ただ、ナカタさんが原著でほとんど「私」を使わないからと言って、そのギャップ全てに“Nakata”を入れると、“Nakata”の出現回数が多すぎて、元々の話し言葉よりもずっとおかしくなってしまう。そのため、その代わりに“I”も使われている

のである。

また、英語翻訳版において、一貫して「ナカタ」が“Nakata”に訳され、主語が省略されているところに“I”が補われているわけではないが、この使い分けについて、Gabriel氏は以下のように語っている。

[...] I think my only operating principle was to sprinkle the “Nakata” usage regularly throughout simply to remind readers of his “odd” speech. You indicate that in some cases I have used *Nakata* in parallel with its usage in Japanese, but I certainly was not conscious of this. As I said, I simply wanted to use it regularly--once each time Nakata spoke, at least. I do not like how in English he switches back and forth between *I* and *Nakata*, but I saw no other way to handle it. (ibid.)

[...] [この“Nakata”と“I”の使い分けを]処理する際に私が唯一使った基本方針は、ナカタさんの話し言葉が「変わっている」ということを単に読者に思い出させるために、定期的に“Nakata”の使用を散りばめるということであった。日本語で「ナカタ」が使われているところと並行して、私も“Nakata”を使っているところがあるようだが、まったくこれを意識してやっていたというわけではない。ナカタさんが[自称詞として]“Nakata”を定期的に—彼が話す毎に少なくとも1回は—使うようにしたかった。英語でナカタさんが“I”と“Nakata”の2つで行ったり来たりするやり方は気に入ってはいないが、これ以外の方法が考えられなかったのである。(拙訳)

原著に従い、ナカタさんは英語の話し言葉の中でも“Nakata”を使っているが、元々の「ナカタ」が“Nakata”に訳され、主語が省略されているところに“I”を補うという法則に機械的に従っているわけではなく、彼の話し言葉の風変わりさを単に読者に気づかせるために、定期的に“Nakata”を使っているのである。アンケート調査では、実際に読者が英語のナカタさんの話し言葉を「“odd” (変わっている)」と感じるのは、主にこの“Nakata”の使用によると報告されている。英語の話し言葉で自称詞として自身の姓を使うこと自体が相当変であり、軍隊のイメージはもちろん、特定の属性とステレオタイプ的に結びつくこともないという。Gabriel氏は“I”と“Nakata”の両方を使用せざるをえなかったことについて好ましく思っていないようだが、英語版におけるナカタさんの話し言葉に「風変わりさ」が保たれているということから、この特徴の果たす役割は大きく、この方法は成功していると言えるであろう。

4.2.3 <幼児語> 「～さん」の使用への対応

原著のナカタさんの話し言葉で幼児の印象と結びつく「[動物] +さん」「[自然・物体] +さん」について、例えば対称詞として出てくる「猫さん」は3箇所あるが、全て“you”と訳されている。ただし、そのうち1箇所(例(31a))、原著における対称詞としての「猫さん」の部分を補うかのように、“Mr. Cat”が呼びかけとして付け加えられている。

- (31) a. 「といたしますと、猫さん<対称詞>はどこかのお宅で飼われているんじゃないんですね」
(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 77-78) (=17a))
“So what you’re saying, Mr. Cat, is that you don’t belong to some family somewhere?”
(p. 44)
- b. 「えーと、それで、あんたは……ナカタさんっていうんだね」
「そうです。ナカタと申します。猫さん<呼びかけ>、あなたは?」(ibid., p. 77) (=17b))
“That’s right. Nakata’s the name. And you would be?” (p. 43)

その他の「[動物] +さん」「[自然・物体] +さん」は全て三人称だが、特定の個体を指す場合であれ(例(32)参照)、その種全体を指す(総称)場合であれ(例(33)参照)、英語訳に接尾辞「さん」に相当するような語は与えられていない。

- (32) a. 「ナカタはただ猫さん<三人称>の行方を探しているだけのものです。[….]」
(→ 犬; ibid., p. 213) (=17c))
“Nakata’s just looking for a lost cat. [....]” (p. 43)
- b. 「今日は雷さん<三人称>がやってきます」
(→ ナカタさん(独り言)/石(物体); 村上 2002b, p. 129) (=17e))
“There’s going to be thunder today,” [...]. (p. 280)
- (33) a. 「[….] このようにナカタは猫さん<三人称・総称>と少し話ができますので、[….]。[….]」
(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 82) (=18a))
“[...] I can speak with cats a little, [...]. [...]” (p. 46)
- b. 「はい。ナカタもそう考えます。ナカタはエンジンさん<三人称・総称>とは話できませんが、相手が誰でありましても、話し合うのはいいことです」
(←→ 星野さん(人間); 村上 2002b, pp. 225-226) (=18b))
“Nakata can’t talk with engines, but it is important to discuss things.” (p. 330)

例えば、(32a)の「猫さん」はナカタさんが探している特定の猫を、(33a)の「猫さん」は「猫」という動物の種類全体を指すが、英語ではそれぞれ“a (lost) cat”、“cats”と訳されている。英語には話し言葉にやわらかさを与える<幼児語>「～さん」に相当するような接辞や語は存在せず、<幼児語>であると言っても、例えばオノマトペの「ニャンニャン」を使っているわけではないので、英語の幼児語である“kitties (<kitty)”などに訳すのもふさわしくないであろう。以上、ナカタさんの話し言葉で観察される<幼児語>「～さん」は、英語の翻訳版において直接的な対応は見られないことがわかる。

4.2.4 カタカナ表記の使用への対応

最後に、4つ目の特徴「(iv)カタカナ表記の使用」について分析する。ナカタさんの発話には漢字で書くのが一般的な語にもカタカナ表記が用いられている場合があり、それは、ナカタさんがそれらの語の意味・概念を理解しておらず、ただ音の羅列としてしか捉えていないことを読者に向けて視覚的に示すためであると述べた(3.2.4参照)。

それでは、英語翻訳版でこれらのカタカナ表記の語はどのように表現されているのだろうか。英語で使用される文字はアルファベットのみであり、カタカナと同じく表音文字のタイプであるが、英語において音と綴りが必ずしも一対一の関係にないことなどうまく利用し、ナカタさんがこれらの語の意味を理解せずに使っていることを巧みに表現している(該当部分に下線)。

- (34) a. 「[...] とくにナカタのお父さんは、もうとっくになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。[...]」

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 79-80)

“Nakata’s father—he passed away a long time ago—was a famous professor in a university. His specialty was something called *theory of fine ants*. I have two younger brothers, and they’re both very bright. One of them works at a company, and he’s a *depart mint chief*. My other brother works at a place called the *minis tree of trade and indus tree*. [...]” (p. 45)

- b. 「[...] 都バスにはショウガイ者とかべつパスというものを見せれば、なんとかのことはできますが」
[...]

「じゃあ、何をして暮らしているんだい？」

「ホジョがでます」

(←→ オオツカさん(猫); *ibid.*, pp. 80-81)

“[...] If I show my *handycap* pass, though, they let me go on the city bus.”

[...]

“Then how do we make a living?”

“I get a *sub city*.”

(p. 45)

(34)に示すように、翻訳版でカタカナ表記の語に対応する語句は全てイタリック体で書かれている。(ただし、固有名詞「イトウチュウ (伊藤忠) [会社名]」は“a company”と、一般化され訳されている(波線部。)) 例えば、「キンユウロン」 “theory of finance” のように相当する英語が複数の語からなる場合は、内容語 “theory” 「(理) 論」と “finance” 「金融」が修正の対象となり、“theory” には間違った綴り “theary” が与えられ、“finance” はナカタさんが意味を理解して使っていると思われるような単純な語 “fine ants” の2語に置き換えられている。“theory” と “fine ants” の発音はそれぞれ元々の語の発音に十分近い。このように、発音は元々の語の発音と同じか近くなるようにして、誤った綴りを与えたり、語を二分割しそれぞれを同じか似たような発音の語と入れ替えたりしているのである。後者のような「語句のこっけいな誤用のこと (特に音や形態が類似している場合に起こりやすい)」を「マラプロピズム (malapropism)」という (『現代言語学辞典』(1988), p. 381)²⁸。

(35) 誤った綴り

(正)

(ナカタさん)

a. キンユウロン (金融論) theory of finance → theary of ...

b. ショウガイ (障害) handicap → handycap

(36) マラプロピズム (malapropism)

a. キンユウロン (金融論) theory of finance → ... of fine ants²⁹

b. ブチョウ (部長) (a) department chief → depart mint ...

c. ツウサンショウ (通産省) (the) ministry of trade and industry →

minis tree of ... indus tree

d. ホジョ (補助) subsidy → sub city

²⁸ これ以外の方法として、いくつかの語からなる句の場合は、語と語の間にスペースを入れずに表記することも可能であろう(「キンユウロン」 “finance theory” を “financetheory”、 「ブチョウ」 “department chief” を “departmentchief” とするなど) (D. Hampton 氏のご教示による (2017年3月30日私信))。

²⁹ アンケート調査の回答者12名のうち4名が “fine ants” は (“finance” ではなく) “fine arts” の置き換えであると誤った予測をした。

いる。ナカタさんが図書館に行ったのはそのときが初めてであり、「ナカタはなにしろ字がよめませんので、図書館に来たのははじめてであります」(ibid., p. 49)と言っているが、ここでは漢字で「図書館」と書かれている。一方、「コウムラキネントショカン」が「トショカン」も含み全てカタカナ表記になっているのは、ナカタさんが星野青年の言ったことを繰り返す際に、全体を「甲村」「記念」「図書館」という3つの部分に分けて処理しておらず、ただの音の羅列としてでしか捉えていないためであろう。

それでは、「コウムラキネントショカン」が英語でどのように表現されているかという点、英語訳の“Komura Memorial Library”を固有名詞“Komura”と一般名詞“Memorial Library”に分けて異なる対応をとるのではなく、“Ko-mu-ra-Me-mori-al-Li-bra-ry”というように、それぞれの語が音節ごとにハイフンで区切られ、さらにフレーズ全体が1つにつながっている。

(39) “*Komura Memorial Library*,” Hoshino read. [...]

“*Ko-mu-ra-Me-mori-al-Li-bra-ry*?”

“You got it. Must be made to commemorate somebody named Komura. [...]” (p. 337)

面白いことに、“Memorial”の音節の正しい区切り“**Me-mo-ri-al**”は“**Me-mori-al**”へと変えられており、このような工夫もナカタさんが新しい語句の意味を即座に理解できないこと、そしてそれを繰り返して言うときのたどたどしい印象と結びついていると言える。

また、アンケート調査の回答の中で、Gabriel 氏のこういったカタカナ表記の語への対応は、ナカタさんの識字能力の欠如を読者に思い起こさせるのはもちろんのこと、「語を音としてでしか理解していない」「自分に関わりのないような抽象的な意味が理解できない」「流暢に話せない」「語を音節ごとに区切らなければ発音できない」など、母語を獲得中の子どものイメージとも結びつく報告されている。〈幼児語〉「～さん」への直接的な対応は観察されないものの(4.2.3参照)、英語版の言葉づかいの中にもナカタさんの子どものような印象は保たれているのである。

4.3 まとめ

本セクションでは、原著に観察されるナカタさんの話し言葉の特徴が、英語翻訳版においてどのように対応されているのかについて考察した。彼の話し言葉の特徴は主に役割語とキャラクター言語の2つのタイプに分かれる。1つ目の役割語は、ナカタさんの人物像(年齢(初老)と礼儀正しさ)とステレオタイプ的に結びつく特定の言葉づかいであり、2つ目のキャラクター言語は、彼と話した人間や猫、そして読者が感じる「すこし風変わりなしゃべり方」を作り出す言葉づかいである。(表1)にその結果を示す。

(表1) ナカタさんの話し言葉の特徴と英語翻訳版における対応

ST: 『海辺のカフカ』(日本語)		TT: <i>Kafka on the Shore</i> (英語)
表現したい印象など [☞: 読者に与えた印象]	特徴的な言葉づかい	対 応
I. 人物像(属性)	<役割語>	
年齢: 初老 [初老らしさ] ☞	i. 俗語・若者言葉の使用なし ii. <老人語>(語彙, 語法) の使用(ごく僅か)	◎ 俗語の使用なし ○ 古風な語句・表現の使用 (語法なし)
礼儀正しさ [礼儀正しさ] ☞	敬語の使用	△ →丁寧度の高い謝罪・感謝・ 依頼・許可表現の使用
II. すこし風変わった話し方	<キャラクター言語>	
[会話の聞き手に対する 敬意・忠誠・服従の念] ☞	i. 「であります」の使用 ii. 自称詞「ナカタ」の使用	× ○ (“I” も並行して使用)
[純粹さ・世間を知らない, 話し言葉にやわらかさが 加わる] ☞	iii. <幼児語>「～さん」の 使用	×
[言語能力・言語運用が 一般的な大人と異なって いること] ☞	iv. カタカナ表記の使用	○ (一般名詞: 誤った綴り, マラプロピズム; 固有名詞: 音節ごとにハイフンで区切る)

注: ◎: 英語版にそのまま適用

○: 適用されているが、英語の特性に従い調整(調整の内容は括弧書き)

△: 英語の特性によってそのまま適用できないが、他の方法を取り入れて補われている(「他の方法」は「→」以下に示す)

×: 適用されていない

(表1)に示すように、ナカタさんの人物像と結びつく言葉づかい(タイプ I: 役割語)は英語版においてなんらかの形での対応が見られる。英語でも俗語を使わず、比較的古風な語句が使用されている。また、英語には日本語の敬語と同等の言語形式が存在しないが、他の方法で補うことによって、原著で表現されていた礼儀正しい印象は損なわれずにいる。一方、ナカタさんの話し方に「すこし風変わった」印象を作り出す4つの特徴(タイプ II: キャラクター言語)のうち、直接的な対応が見られたのは「自称詞「ナカタ」の使用」と「カタカナ表記の使用」の2つのみであった。しかし、自称詞“Nakata”の使用だけでも、英語版の読者に彼の話し言葉の風変わりさを感じさせるのに十分であり、実際に物語の中

で何人かの登場人物が抱いた「すこし風変わり」な印象と一致していることを認識させるためにも、とても重要な役割を果たしている。また、原著で読者が「<幼児語>「～さん」の使用」から受けたナカタさんの子どもらしい印象は、英語版における「カタカナ表記の使用」への対応が受け継いでいるのも面白い。このように、ナカタさんの英語の話し言葉には、Gabriel 氏の解釈と判断によって、原著では役割語の使用によって表現されていた彼の属性と結びつく特徴と、風変わりさを感じさせる要素が保存されつつ、話し言葉全体としては読者によって違和感を感じられることもなく、自然な話し言葉に訳されているのである。

5 結びにかえて

日本語と英語は言語間における言語・文化の距離がかけ離れており、語・句・文法だけでなく、使用される文字システム等、さまざまなレベルにおいて本質的に異なる。また、日本語には言語変種が数多く存在し、キャラクター形成のために変種が意図的に使われることがあるが、これが翻訳を一層困難にしているのである。本稿では、ケーススタディとして特定の文学作品の英語版の翻訳者が日本語の役割語やキャラクター言語に対して具体的にどのような訳出の方法を採ったのか（あるいは採らなかったのか）、そしてその判断の理由について考察した。ただし、本研究で得られた結果が役割語やキャラクター言語の翻訳全般に一般化できるわけではなく、また現時点では翻訳理論と日本語の役割語・キャラクター言語の理論を結びつける先行研究が少ないということもあり、多くの課題が残されていると考える。今後は、日本語の文学作品において観察される役割語・キャラクター言語の英語翻訳の分析のサンプルを増やし、同時に英語とは異なる特性を持つ他言語の翻訳版との比較も行っていく。これによって、役割語・キャラクター言語の研究の新たな発展だけでなく、日本語の文学作品の翻訳の理解と質の向上へとつながることを期待したい。

資料文献

Kurosawa, A. (Director). (2006). *Seven Samurai* [Motion Picture] (unknown, Trans.). New York:

Criterion. (Original work published 黒澤明 (監督) (1954) 『七人の侍』 東京: 東宝.)

森淳一 (監督) (2002) 『ランドリー』 東京: メディアファクトリー.

村上春樹 (1987) 『ノルウェイの森 <上>』 東京: 講談社.

村上春樹 (2002a) 『海辺のカフカ <上>』 東京: 新潮社.

村上春樹 (2002b) 『海辺のカフカ <下>』 東京: 新潮社.

Murakami, H. (2005) *Kafka on the Shore* (J. P. Gabriel, Trans.). New York: Knopf.

参考文献

- Colina, S. (2015) *Fundamentals of Translation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 加藤典洋 (2004) 『村上春樹 イエローページ PART2』 東京: 荒地出版社.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 東京: 岩波書店.
- 金水敏 (編) (2014) 『<役割語>小辞典』 東京: 研究社.
- 金水敏 (2016) 「役割語とキャラクター言語」 金水敏 (編) 『役割語・キャラクター言語 研究 国際ワークショップ 2015』 pp. 5-13. 私家版. 大阪大学大学院文学研究科.
- Kinsui, S. and H. Yamakido (2015) “Role Language and Character Language.” *Acta Linguistica Asiatica* 5(2): 29-41.
- 衣畑智秀・楊昌洙 (2007) 「役割語としての「軍隊語」の成立」 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』 pp. 179-192. 東京: くろしお出版.
- Koller, W. (1979) “Equivalence in Translation Theory” (A. Chesterman, Trans.). In A. Chesterman (ed.), (1989) *Readings in Translation Theory*, pp. 99-104. Helsinki: Finn Lectura.
- 村上春樹 (2003) 『少年カフカ』 東京: 新潮社.
- Nida, E. A. (1975) “Varieties of Language.” *Language Structure and Translation: Essays by Eugene A. Nida*. Stanford: Stanford University Press. (Original work published 1972)
- 岡崎友子・南侑里 (2011) 「役割語としての「幼児語」とその周辺」 金水敏 (編) 『役割語研究の展開』 pp. 195-212. 東京: くろしお出版.
- 柴田みどり・阿部純一・寺尾敦・宮本環 (2007) 「隠喩理解過程の神経基盤: fMRIによる検討」 『認知科学』 14(3): 339-354.
- 田中春美 (編) (1988) 『現代言語学辞典』 東京: 成美堂.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (編) (2012) 『新明解国語辞典 第七版』 東京: 三省堂.
- 山木戸浩子 (2018) 「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」 『通訳翻訳研究への招待』 19: 1-21.
- Yau, W.-P. (2014) “Translation and Film: Dubbing, Subtitling, Adaptation, and Remaking.” In S. Bermann, and C. Porter (eds.), *A Companion to Translation Studies*, pp. 492-503. Chichester: Wiley Blackwell.
- 吉田理加・坪井睦子 (2013) 「社会言語学」 鳥飼玖美子 (編) 『よくわかる翻訳通訳学』 pp. 166-167. 京都: ミネルヴァ書房.
- 洋泉社編集部 (編) (2013) 『増補改訂版 村上春樹 全小説ガイドブック』 東京: 洋泉社.

小説における仮名の一用法と翻訳

—村上春樹作品を例に—*

金水 敏

(大阪大学)

言うまでもないが、現代日本語の小説は、他の一般的な文章と同様に「漢字仮名交じり文」で書かれている。これは、概念語（名詞、動詞、形容詞、形容動詞等の語幹）のうちの漢語と和語を表意文字である漢字と平仮名で書き、機能語や文法的な成分（助詞、助動詞、補助動詞、活用語尾、指示代名詞等）を平仮名で書くというシステムである。中でも和語の概念語のうち、どの程度漢字を多く使うか、平仮名を多くするかという割合は、読み手のリテラシーや書き手の好み・書き癖等でヴァリエーションがある。しかし、いわゆる漢語、特に専門語、技術用語などは漢字で書くのが基本である。

これに対し、片仮名はやや特殊な位置づけにある。まず、外来語・外国地名を表記する時に用いる（例「コンピューター」「ニューヨーク」）。次に、オノマトペ（特に擬音語）を表記する（例「バリバリ」「ドカン」）。オノマトペについては、擬態語には主に平仮名、擬音語には主に片仮名を用いるという緩やかな役割分担がある。そして、振り仮名等で、固有名詞などの読みを示す（例「^{キンスイ} 金水 ^{サトシ} 敏」）。これは、平仮名にも同様の用例がある。その他、普通は漢字で表記される語を片仮名（および平仮名）で表記することで、特殊な効果を生じさせる用法がある。本稿では、特にこの最後の用法について着目したい。これは、話し手がその表現の意味を理解しないまま（あるいは用字を知らないまま）口移しのように音声を発していることを表すか、あるいは相手の言った単語が聞き手に十分理解できず、適切な字を思い浮かべることができなかった、というような場合が想定できる。前者の例は、特に幼い子供の発話にしばしば見られる（下線は引用者による。以下同様）。

(1) よつば「あ わかった！ ふーか！」

* 本稿は、『ことばと文字』10: 83-89（発行所：公益財団法人 日本のローマ字社 発売所：くろしお出版）に公開されたものの採録である。

風香「ん？」

よつば「ふーかはしつれんしました！」

風香「あ、そうです。わかってくれましたか」（『よつばと！』4、118頁）

(2) 「これは何て読むの？」

「これは^{ふんけい}勿頸の友」

「どういう意味？」

「とても仲のいい友達、という意味だよ」

「最初から、“仲のいい友達”って使ったらだめなの？」

「別にかまわないけど、あえて難しい言葉を使った方がかっこうよかったり、言いたいことがよく伝わったりすることもあるんだよ」

へえ、と相づちを打ちながら、すでに本への興味を失ってしまったかのこちゃんは、早々に椅子から下りた。「ふんけー」「ふんけー」「ふんけー」と口ずさみながら、スキップで隣の部屋にいるお母さんのもとに移っていった。（『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』角川文庫・Kindle版 No. 309/2157）

次に、相手の言ったこと（特に用字）が分からない場合の例を挙げる。

(3) 「私は^{あんきょ}暗渠がこわいの」と彼女は膝を両腕で抱きしめるような格好で言った。「暗渠」って知ってるでしょう？ 地下の水路。蓋をされた真っ暗な流れ」

「アンキョ」と僕は言った。どんな字を書けばいいのか、僕には思い出せなかった。（『ねじまき鳥クロニクル』第1部 泥棒かささぎ編、新潮文庫、230頁）

少ない例で一般化することはむずかしいが、幼児の発話の場合は、片仮名より平仮名が好まれる印象がある。片仮名はどうしても外国人の印象を与えやすいのに対し、平仮名は初学者のイメージを与えやすいという違いがあると思われる。

これらの例のような文字種の操作は、発話の音声に特徴があるというよりは、話し手の理解という目に見えない状態を、日本語の表記を巧みに用いて表現していると言える。

さてここからは、村上春樹の小説に登場する、二人の特異なキャラクターの話し方について取り上げたい。一人は、『海辺のカフカ』に登場する「ナカタさん」、もう一

人は『1Q84』に登場する「ふかえり」こと深田絵里子である。この二人の話し方には共通性があり、難しい漢語や固有名詞が片仮名で表記されているのだ。まずナカタさんは、『海辺のカフカ』の偶数章の登場人物で、60歳過ぎの老人だが、子供時代に疎開先で遭遇したある事件をきっかけに知的能力を損ない、読み書きができなくなった。ナカタさんは、自分のことを「頭が悪い」と考えている。また、基本的に「わたし」「ぼく」のような一人称代名詞を用いず、自分で自分のことを「ナカタは……」のように名前で示す。そして、誰に対しても「～であります」のような超丁寧なスタイルで話す。このような点から、周りの人物から「変わった話し方をする」と評価されている（金水 2018b, 山木戸 2018）。例えば次のような発話である。

- (4) 「(中略) とくにナカタのお父さんは、もうとつくになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。二人とも大きな家に住んで、ウナギを食べております。ナカタひとりだけが頭が悪いのです」(第6章, 上・69頁)

一方、『1Q84』のふかえりは、父が教祖である宗教施設を抜け出し、父の友人のもとで暮らしている17歳の少女である。ナカタさんと同様に、「ディスレクシア（読字障害）」であると周囲に認識されている。話し方は、一切の丁寧語、終助詞、イントネーションを伴わない片言的な発話のみからなる。例えば次のようなものである。

- (5) 「スウガクがすき」

天吾は彼女の発言の末尾に疑問符をつけ加えてから、あらためてその質問に返事をした。「好きだよ。昔から好きだったし、今でも好きだ」

「どんなところ」

「数学のどんなところが好きなのか？」と天吾は言葉を補った。「そうだな、数字を前にしていると、とても落ち着いた気持ちになれるんだよ。ものごとが収まるべきところに収まっていくような」

「セキブンののはなしはおもしろかった」

「予備校の僕の講義のこと？」

ふかえりは肯いた。(『1Q84』BOOK1 前編、109-110 頁)

ナカタさんとふかえりの発話の違いについても述べておくと、ナカタさんは敬語の適用の仕方がおかしいのと、自称の「ナカタは……」が奇妙に聞こえるだけで、日本語としての完成度自体はむしろ高い。表記の上でも、小学校高学年程度の漢字は普通に用いられていて読みやすい。これに対しふかえりの発話は、極度に片言的でコミュニケーション能力そのものに問題があるように感じさせる。表記の上では、ごく簡単な漢字以外は避けられて、平仮名ベースで書かれており、一定以上の難易度の漢語が片仮名で書かれている。このような、漢字平仮名交じりベースか、平仮名ベースかという違いは、むしろキャラクターの設定によるものであり、特に両者の年齢の違いが大きいだらう。

さて、他の村上春樹作品と同様に、『海辺のカフカ』『1Q84』は多くの言語に翻訳され、出版されているが、このように日本語の文字種の操作による表現は、翻訳家を悩ませる問題の一つとなる。その対処法は大きく言って二つある。一つは文字種の違いを無視し、通常と同様に翻訳する方法である。もう一つは、ターゲット言語にある何らかの方法を用いて、原文の効果の再現を試みるということであるが、原文と同様の効果が得られる保証はなく、逆に原文にはないニュアンスを与えてしまう場合もある。

まず『海辺のカフカ』のナカタさんについて、英語の翻訳の状況が山木戸 (2018) に詳しく報告されており、また、金水 (2018) に、中国語版、タイ語版、韓国語版、ポーランド語版、ロシア語版、チェコ語版、スウェーデン語版についての調査・報告が収録されている。山木戸 (2018) によれば、英語版における、これらの片仮名表記に対応する箇所はすべてイタリックになっているが、それ以外にも **theory** を **theery** にするなど、誤った綴りを用いたり、**finance** を **fine ants** にするなど、滑稽な聞き間違い (マラプロピズム *malapropism*) の手法を用いて、ナカタさんの理解がこれらの語に及んでいないことを表している。同様の手法は、ポーランド語版 (Wojciechowicz 2018)、チェコ語 (中屋 2018)、スウェーデン語 (リンドソコグ 2018) でも取られていて、ポーランド語の場合は形態素の切り方を操作してアクセントの位置を変えている。またチェコ語版では、より滑稽な聞き間違いにして、原作にはないおかしみを

加えてもいる。

『1Q84』のふかえりの発話の翻訳については、住田 (2018) が、英語版、韓国語版、中国語版 (繁体字版) を対象に調査を行っている。片仮名表記については、英語版、韓国語版では特段の対応がなかったが、繁体字版では、片仮名の箇所には注音符号を用いるという工夫が凝らされていることを報告している。

(6) 「喜歡尸`メTロ'セ。」 (『1Q84』BOOK1, 61 頁)

注音符号は、韻母、介音、韻尾と声調を表音的に書くための記号で、台湾では拼音 (ピンイン) 以上に広く使われている。(6)の例では、「尸`メTロ'セ」で、shù xué すなわち「数学」の発音を表している。試みとしては興味深いが、例えば台湾の読者にとってこの表記がどのような印象を与えるのか、日本語の片仮名と近い効果を持つかどうかについては、住田 (2018) には報告がない。なお検証の必要があろう。なお、手元の簡体字版を見てみると、片仮名の箇所については一切対処がされていないようである。

(7) “喜欢数学。” (『1Q84』BOOK1, 55 頁)

以上見てきたように、日本語の多様な文字種は、創作の世界において魅力的な表現手段の一つとなっているが、ひとたび翻訳という局面から見た場合、悩ましい問題を引き起こすことが分かった。その対処法は、ターゲット言語の事情に加えて、翻訳者・編集者の判断も大きく関わるものと想像される。適切な翻訳手段が見つからない場合は、むしろ無視されるケースが多いのである。今後も事例を積み重ねて、分析を深めたい。

(大阪大学大学院文学研究科教授・博士 (文学))

【使用・参照したテキスト】

『よつぱと!』4 (あずまきよひこ著、電撃コミックス、KADOKAWA、2005 年)

『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』(万城目学著、角川文庫、Kindle 版、2013 年)

『ねじまき鳥クロニクル』第 1 部 泥棒かささぎ編 (村上春樹著、新潮文庫、1997

年初刷、2010年改版)

『海辺のカフカ』上 (村上春樹著、新潮文庫、2005年初刷)

『1Q84』BOOK 1〈4月-6月〉前編 (村上春樹著、新潮文庫、2012年初刷)

Kafka on the Shore, J. Philip Gabriel (transl.), Knopf (U. S. A.), 2005. 【英語版】

Kafka nad morzem, Anna Zielińska-Elliott (transl.), Warszawskie Wydawnictwo Literackie MUZA SA, 2011. 【ポーランド語版】

Kafka na pobřeží, Tomáš Jurkovič (transl.) Euromedia Group k.s. – Odeon, 2006.

【チェコ語版】

『1Q84 BOOK 1 4月-6月』(頼明珠訳、時報文化出版、2009年)【中国語・繁体字版】

『1Q84 BOOK 1 4月-6月』(施小煒訳、南海出版公司、2010年)【中国語・簡体字版】

【参考文献】

金水 敏 (編) (2018a) 『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (1)』大阪大学.

金水 敏 (2018b) 「魅惑するナカタさんワールド」沼野充義 (監修)・曾秋桂 (編) (2018)、43-60 頁.

住田哲郎 (2018) 「『1Q84』・「ふかえり」の魅惑を創出する日本語の特性」沼野充義 (監修)・曾秋桂 (編) (2018)、305-334 頁.

中屋テレザ (2018) 「『海辺のカフカ』の登場人物ナカタさんの役割語とチェコ語版への反映」金水 (編) (2018) 105-125 頁.

沼野充義 (監修)・曾秋桂 (編) (2018) 『村上春樹における魅惑』淡江大学出版中心.

山木戸浩子 (2018) 「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳 -村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える-」『通訳翻訳研究への招待』Vol. 19, 1-22 頁, 日本通訳翻訳学会.

リンドソグ, セバスティアン (2018) 「『海辺のカフカ』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳の仕方について」金水 (編) (2018a) 88-98 頁.

Wojciechowicz, Tomasz (2018) 「『海辺のカフカ』の原書とポーランド語翻訳書との比較・対照」金水 (編) (2018a) 54-87 頁.

注記:

金水 (編) (2018a) は、大阪大学リポジトリ OUKA からダウンロードできる。URL

は下記の通り。

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

山木戸（2018）は、下記のサイトで公開されている。

<http://honyakukenyu.sakura.ne.jp/>

著者情報

金水 敏 (きんすい さとし)
大阪大学・大学院文学研究科・教授

山木戸 浩子 (やまきど ひろこ)
藤女子大学・文学部・准教授

麻 子軒 (ま しけん)
大阪大学・大学院文学研究科・招聘研究員

『村上春樹翻訳調査プロジェクト 報告書 (2)』

2019年3月25日発行

編集：金水 敏（大阪大学大学院文学研究科）

kinsui@let.osaka-u.ac.jp

発行所：大阪大学大学院文学研究科

編集補助：武内一巴

※この報告書の刊行は、文学研究科国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究」に基づいて行われました。

